

AZ stocks

vol.4

【無料】電子版同人マガジン



女性向けオリジナル作品 (BL作品)



Contents

- 目次
- キャラクター紹介
- EL～光を継ぐもの～第二章
- イラスト
- 編集後記
- 奥付

【電子版同人マガジンについて】

こちらは天使・悪魔・墮天使などをテーマとした異世界ファンタジー漫画や小説、イラストを掲載した電子版雑誌です。

【発行元について】

女性向けオリジナル同人サークル

「となりくみ事務局」が作成しています。

URL <http://www3.to/tonarikumi>

<http://june.lix.jp/azstocks/>

E-mail tonarikumi@gmail.com

ご質問やお問い合わせは上記までお願いします。ご感想などいただくと、創作活動の励みになります。

* Vol. 4 * * *

無料の電子版同人マガジン[AZ stocks]のVol.4です。EL～光を継ぐもの～の第二章公開です。清純な二人の過去の話になります。執筆した私、Neikoとしては断罪者がお気に入りです。

この後、話は核心部分に突入していきます。実ははっきりとしたラストを私も知りません（^^;）。

設定などは全てZEMが担当しているので、小説部分を書いている私も展開にドギマギしている所です。まず、第二章をお楽しみください。続きも早く公開できるよう努力します。【サークルメンバー同】





EL ~光を継ぐもの~
第二章



何でも無い普通の日々。

他愛無い会話や行動。

そんな小さな事が積み重なって出来上がる関係。

それが絆とか、信頼とか、友愛などと呼ばれるかけがえのない繋がりになっていく。

心地良い時間はとても大切なモノなのに、悲しいけれどそれに気付けない事が多いのは事実だ。

辛さに気付く時には、大抵、何かを失う。

冷静に考えれば解る事なのに、全ては「永遠」だと錯覚し、悲しい事実には気付かずに居る。

だから簡単に約束してしまうんだ。

ずっと一緒だよ

守る事が困難な約束だと何故解らないのだろうか。

きっとそれは僕達の胸に「期待」や「希望」があるからだ。

光に包まれた世界で、正義を貫き、優雅で毅然とした崇高な存在でなければならないのに、どうして脆弱で未熟で不安定な存在を抱くモノを僕達が持つのか。

それはつまり、僕達もまだ脆弱で未熟で不安定な存在である、という事だ。

でもそれは悪い事なのか。

僕には解らない。

幻惑にも似た夢を抱く天使.....。

それは許されないのだろうか。

そんな存在を神は望まないのだろうか。

全ては神の為、正義の為に生きる僕達.....。

絶対なる存在の理想に少しでも近付けるよう勇往邁進しながらも、僕達は愚かとも言われる「期待」や「希望」を抱いて羽ばたいている。

大切な者達と交わした「約束」を果たそうと、無様にあがきながら.....。

抜けるような青い空の下に朝霧が広がっていた。

木々をしっかりと濡らす朝霧は鋭く切り立った絶壁が作る谷間にも満ちている。

絶壁は山脈に沿って数キロに渡り続いていて、幾条もの白い瀑布と深い緑の木々に覆われていた。

切り立った崖の上から激しく流れ落ちる瀑布は四方八方へ純白の飛沫を撒き、登り始めた陽の光を受けて大きな虹を作り上げている。朝霧と虹が同時に存在する谷間には荘厳な空気が流れていた。

そんな空気に包まれた鍛錬場にアスベエルは居た。

絶壁と絶壁の間に浮かぶ巨大な岩の上に作られた円形の鍛錬場に柵は無い。

端に立ち、誤って足を滑らせてもすれば奈落の底へ真っ逆さまだ。遥か下にある大地は余りに遠く、その存在を見て取る事はできない。

鍛錬場の上でアスベエルは天使の象徴とも言える純白の翼をはためかせ、宙を舞い、激しくもしなやかな動きで師と拳を交えていた。

師の拳や蹴りを上手く受け止め、その力を流してかわす。

端に追い詰められ、突き落とされても焦らず態勢を整えて舞い戻る。

アスベエルは小柄で華奢だ。肉弾戦に適した体ではなく、力で相手を上回る事は難しい。

だからアスベエルは常に冷静に状況を把握して対処する能力と俊敏性を磨いていた。

「そろそろ終わりじゃ。陽が昇ったぞ」

師の言葉を聞いたアスベエルは舞い上がった宙で一度動きを止め、コクリと小さく頷いた。

そして勢いを付けて師の元へ急降下した。その手刀は師の首元を狙っていた。

バシッと乾いた音が朝霧の中に響いた。

アスベエルの手刀は師の首を捉える事ができず、逆に胸を師の掌で強打された。

一瞬、アスベエルの呼吸が止まった。

少しの静寂の後、アスベエルはゲホゲホと咳き込みながら膝を着いた。

「ホッホッホッ、お前は正直過ぎる。何処を狙っているか丸解りじゃ。速さだけで相手の急所を捉えられると思うな」

「いってええ！」

「それにお前は腕が短い。お前の手が僕の首に触れる前に、その首根っこを摘み上げる事など朝飯前じゃ」

白く長い顎鬚をさすりながら笑う師を睨み上げながらアスベエルは負け惜しみを口にした。

「俺の事、子猫みてえに言うんじゃねえ！ 顔面に叩き込んでやろうと思ったけど酷過ぎると思って狙いを変えたから、ちょっと遅れちまっただけだ！」

「金瞳と黒髪が可愛いが何とも口が悪い。それに動きの荒さが目に余る。飼うにはもっと躰が必要じゃな」

笑う師は若草色の服の乱れを直すと背に負う四枚の翼をバサリと広げた。

「いい加減、子猫扱い止めてくれよ！ これでも士官学校の特別士官候補生なんだぞ！」

「おお、おお。そうじゃったな。ミルクを卒業して肉に齧り付くようになった生意気なチビ猫じゃった」

「こおの、クソ爺！」

「これこれ、仮にも特別士官候補生が汚い言葉を使うな。あんまり生意気な態度を取るなら、もう相手をしてやらんぞ」

髪も眉毛も顎鬚も真っ白で長い師はホホホと笑いながらフワリと舞い上がった。

開けていても長く白い眉毛に隠れて解り辛い目は、笑うと完全に皺に隠れて見えなくなってしまう。

「何だよ。俺みたいな若いのを相手にしない生活ってどんなんだよ。天井まで届く本棚に囲まれた部屋で分厚い魔導書でも読みながら精霊達と会話する隠居生活か？ んな事したらあつという間に老いぼれるぞ」

「全く、なんじゃ、その口は。礼のひとつも言えん奴が特別士官候補生とは呆れたもんじゃ。候補生から外す様に儂から学校長に言ってやろうかのお」

アスベエルはウツと声を詰まらせた。

翼を二枚しか持たないアスベエルと違い、師は四枚の翼を負っている。士官学校の誰よりも高い階級に居る天使だ。そんな彼が言えばアスベエルは候補生から外れるどころか、士官学校を退学となるだろう。

「悪かった！ 言い過ぎた！ こんな下っ端天使の相手してくれる事には感謝してる。本当だつて」

「では、そのうち『獅峰甘露』でも貰おうか。若葉で茶を淹れ、根を塩漬けにすると実に美味しいんじゃ」

「はあ?!」

「楽しみにしておるぞ」

「おい！ んな無茶な！」

「感謝と畏敬の念というものを覚えて行動で示する良い機会じゃろ？」

師は笑い声を残して朝霧の中へ舞い上がり、陽の光の中へ消えていった。

「ったく！ んな超高級品、どうやって手に入れるんだよ！ 無茶苦茶だつて！」

空に向かって叫んだアスベエルはバサリと翼を揺らすと絶壁へ向かって飛び立った。

絶壁を流れ落ちる滝のひとつに飛び込み、頭から激流を浴びる。全身の汗と土埃を流し清めると崖に生える木の枝に立った。

清々しい朝の光に包まれた風景を見詰める。聞こえるのは瀑布の音と小鳥達のさえずりだけだ。闘志に包まれていた心と体が鎮まっていく。気分を一新するのに良い場所だった。

「さて、行くか」

短い黒髪の水気を拭き取ってからアスベエルは近くの枝に引っ掛けてあった士官学校の制服に身を包んだ。

胸元には成績優秀者のみが貰える特別士官候補生のバッヂが付いている。

朝陽を浴びてキラリと光るそれを指で撫でてからアスベエルは翼をはためかせた。

朝霧を抜け、真っ青な空に舞い上がる。

朝の日課、武術鍛錬を終えた天使アスベエルは士官養成学校へ向けて羽ばたいて行った。

湖の畔、森林の中に赤いレンガで建てられた古い城があった。士官養成学校だ。

あらゆる喜びや悲しみを歌で表す風の乙女達の吐息を長い期間受け止め続けたレンガの壁は威風堂々としていて、木々の緑の中で美しく荘厳な赤に見えた。

建物の中へ入って行くのは天使の中でも悪魔達と対峙する軍に所属する事を望む者達だ。

神々の為に闘い、命を捧げる勇敢な天使を目指す彼等の表情はどこか誇らしげで、建物がまとう雰囲気よりも一層気高いものにしていて。

そんな士官養成学校に一人の天使が舞い降りた。朝の鍛錬を終えたアスベエルだ。

アスベエルが降り立った湖畔は芝が植えられていて花壇もある。あちらこちらにベンチも用意されていて、学外ではあるが校庭として生徒達が利用する人気の場所となっていた。

純白の翼を優雅に揺らしてフワリと湖畔に降り立ったアスベエルは校庭を見まわした後、学校の正門に足を向けた。

授業が始まるまで後少し。己の教室に向かうべく門をくぐる者も居れば、まだ時間は有るとでもいうように門の周りで談笑する者達も居る。

立ち止まっている生徒の中に一際背の高い者が居た。淡い紅色の長い髪をポニーテールにした彼は笑顔で金髪の女子生徒と話している。

「アイツ、また性懲りも無く！」

舌打ちしたアスベエルが駆け出した。

「おい、ライシエル！ 何やってんだよ、朝っぱらから！」

ライシエルと呼ばれた生徒が振り返った。その顔は人の好きそうな笑みのままだった。

「おや、誰かと思えばアスベエル。おはよう。今日もとっても可愛いね」

ライシエルは今まで言葉を交わしていた女子生徒に「また後で」と声を掛け、手の甲に口付けしてからアスベエルに向き直った。

「私が美人と話をしていたから妬いた？ 君にそんな想いをさせるつもりは無かったんだけど……。軽率だったかな？ ゴメンね」

わざとだろうか。まるで胸が痛むとでもいうように左手で自分の胸を抑えた後、ライシエルは右手でアスベエルの頭をポンポンと撫でた。

「誰が妬くか！ それよりいつも言ってるだろ！ 入学してねえのに勝手に制服着て紛れ込むな！ ナンパするな！ それにポンポンするな！」

「怒った金瞳も素敵だね。君の頭は丁度良い高さなんだ。だからつついっポンポンしてしまう。悪気は無いよ」

「俺がチビみたいに言うな！ それに紛れ込むんじゃないかってお前も入学しろよ。そしたら堂々と中に入れるだろ？」

「紛れ込むスリルを味わいながら可愛い子を探すのがいいんだよ。ちょっと悪い所とか、謎めいた部分がある方がモテるって知らない？」

終始笑顔で話すライシエルに向かってアスベエルは大仰にため息を吐いて見せた。そして一歩

間合いを詰め、人差し指でライシエルの胸元を突きながら言った。

「ライシエル、友達として忠告する。お前は天使だ。天使っていうのは主である神の為に尽くす存在だ。それなのに不純な動機で士官を養成する学校へ忍び込んだり、次から次へと女子生徒を口説いて回るなんてもってのほかだ！　少しは天使としての自覚を持って精進しろ！」

「綺麗な金の瞳で見詰められながら告白されると胸が熱くなるね」

「告白なんかしてない！」

「焼きもち焼かれるとナンパし辛くなるなあ。あ、ひとつ訂正をお願いしようか。私が口説くのは『可愛い子全員』だよ」

ライシエルはアスベエルと会話している間にも近くを通り過ぎる生徒に笑顔を向けたり、手を振ったりしている。細身でスラリと背が高く、ポニーテールにしているがやや乱れ気味にも見える長い紅髪が印象的なライシエルが笑みを作れば女子生徒はたちまち頬を赤くする。友達同士で何やら話しながら嬉しそうな表情で手を振り返してくる者も少なくない。

キッチリと制服を着こなしているが、どこことなく女性的にも見えるライシエルは正しく優男で、雰囲気も柔らかく気さくに声を掛けられる「モテる男」とも言えた。

アスベエルは暖簾に腕押しの友人に対し、ガクリと肩を落として見せた。

「何で俺、お前みたいな奴の友達なんだろう」

「フフフ。そうやって悩む姿も可愛いね」

「お前って、器用そうだし、身のこなしも悪くねえし、真面目にしてりゃ直ぐにでも士官になって卒業できそうなのになあ。何で入学しねえの？」

「私が士官になったら悲しむコが沢山居るからね」

「意味解んねえ！」

眉間に皺を寄せたアスベエルは気を取り直して顔を上げ、校舎の方へ視線を向けた。

「好きにやってろ。お前はお前。俺は俺。特別士官候補生として上を目指すのみだ」

「頑張り屋さんだね、アスベエルは。今朝も滝の鍛錬場で汗をかいてきたの？」

「ああ。俺の日課だからな。あれで一日がスタートするんだ。いつ何があっても良い様に常に緊張してないとな」

目を輝かせるアスベエルの姿をライシエルは眩しそうに見ていた。慈しむような目だった。

「そうだ！　なあ、ライシエル」

「なに？」

「お前『獅峰甘露』って知ってる？」

「『獅峰甘露』って、あの高級なお茶？」

アスベエルはコクリと頷いて困った表情を作り、師範との遣り取りをそのままライシエルに伝えた。

「アハハハハ。それは頑張って準備しないとイケないね」

「もう、どうやって手に入れればいいのかサッパリ解らないんだ。どうすりゃいいと思う？」

アスベエルの言葉にライシエルはニッと笑った。薄い唇が意地悪く吊り上がる。

「それ、私に『助けて』って言ってるの？」

「あ、いや、その……。何か良い方法があるなら教えて欲しいっていうか……」

「可愛いアスベエルの頼みなら聴いてあげてもいいよ？ 私に頼んでみる？ 力を貸してくださいって」

顔を覗き込まれたアスベエルはウツと返す言葉に詰まった。

頼めば借りを作る事になるが、頼まなければ解決の糸口を失う事になる。暫く口を真一文字に結んだままで居たアスベエルは、苦々しい顔を作った後で頭を下げた。

「ち、力を貸してください。お願いします」

「あー、もう、可愛いなあ、アスベエルは！」

ライシエルがまたポンポンとアスベエルの頭を撫でた。

「だからポンポンするなって！」

「可愛い私のアスベエルの頼みだから何とか策を考えてみるよ。期待して待ってて」

反論しようとしたアスベエルの耳に鐘の音が聞こえた。予鈴の音だった。

「マズイ！ 早く行かないと間に合わないや。またな、ライシエル！」

「素直で可愛いお姫様に会えて良かったよ。いってらっしゃい、アスベエル。あ、もう一人の姫君、フェンリエルは『礼拝堂に行く』って言ってたよ。君が来る少し前だったかな？」

「サンキュー！ またな！ ナンパ、程々にしろよ！」

アスベエルは言い終えると同時に翼を広げた。バサリと音を立てて舞い上がると教室ではなく礼拝堂へ向けて飛び立った。講義が始まるまでまだ少し時間がある。親友フェンリエルを探すつもりだった。

青々と澄み切った空に鐘の音が響き渡る。

今日も士官養成学校の光に満ちた一日が始まろうとしていた。

士官養成学校は湖から続く丘陵に建っている。礼拝堂は一番高い場所にあった。鐘がよく響くからだ。

石造りの入口をくぐると四方を囲む色鮮やかなステンドグラスと、奥の壁側に据えられた金に輝くパイプオルガンが目飛び込んで来る。

色とりどりの淡い光に包まれた礼拝堂の中ほどに一人の生徒が居た。フェンリエルだ。

「フェン……」

アスベエルは途中で親友の名を呼ぶのを止めた。彼の前に教師が立っていたのだ。

礼拝堂の入口近くの席で様子を見守っていたアスベエルは教師が去ってからピョンと跳ねる様に立ち上がった。フェンリエルは直ぐに気付いた。

「あれ？ アス。よくここだって解ったね」

「ああ。ライシエルが教えてくれた」

「アスも会ったんだ」

「正門に立って金髪の女の子ナンパしてた」

「僕が見た時は黒髪の女の子だったよ」

「全くアイツは何考えてるんだ！」

「多分、君や僕とは違う事だね」

ペリドットのようなオリーブグリーン瞳を細めてフェンリエルは笑った。その顔を見たアスベエルもへへッと笑みを作った。フェンリエルが笑うとその場の空気が不思議と和んだ。

「さっきの、指導部の教師だろ？ 何かあったのか？」

アスベエルは教師が消えた控室の方を見ながら首を傾げた。生徒の間では指導部の教師は有名だ。それにアスベエルも過去に何度か話をした事があった。

「う、ん……。ちょっと、ね」

フェンリエルは苦笑いしながら言葉を濁した。それもそのはず。指導部の教師が出て来る場面というのは、生徒にとって良くない場合が多い。

だが、フェンリエルのような大人しくて素行の良い生徒が指導を受ける事をアスベエルは不思議に思った。

「お前が指導されるなんて有り得ないだろ？」

「それが……」

「はっきり言えよ。何があったんだ？」

迷う様子を見せた後、フェンリエルは小さく頷いた。

「僕について良くない噂があるらしいんだ」

「フェンに関する噂？」

「僕が図書館の奥にある禁書保管庫で上級生相手に淫らな行為に及んでいるって噂」

「はあ？」

「ほら、今度『任務随行訓練』があるって噂があるでしょう？」

「悪魔に魅入られた修道女を救う任務か？」

アスベエルやフェンリエルが通う士官養成学校では、優秀な生徒は「特別士官候補生」としてレベルの高い授業を受ける事ができる。

その特別授業の中に「任務随行訓練」というのがある。人間界や魔界に出撃する天使達の任務に同行し、実際の戦闘に参加する訓練だ。

「任務随行訓練」は滅多に無いし危険を伴うものだ。しかし任務遂行過程で功績を残せば士官として早く卒業できるだけでなく、天使軍の上官達と知り合う機会が得られ引き抜きも期待できる。一足飛びの昇進を狙う事だって夢ではない。

特別士官候補生達の誰もがこの訓練参加メンバーになる事を望んでいると言っても過言ではなかった。

今、特別士官候補生達の間で久し振りの「任務随行訓練」が話題となっていた。

その任務とは「悪魔に魅入られた修道女達を救い、パンデモニウムと化した修道院を浄化するもの」であった。この任務に数名が同行させて貰えるらしい。正式に発表された内容では無いが、耳が早い生徒というのは何処にでもいる。

「そう、僕がその任務随行訓練をネタにした遊びをしているって噂が広がっているらしいんだ。悪魔に魅入られた修道女の真似事をする僕を上級生達が折檻して悔い改めさせる、という遊びを禁書保管庫で密かにやっているって噂……」

フェンリエルの言葉を聞いたアスベエルが顔を真っ赤にした。

「そ、そんな事をフェンがする訳ないだろう！ 有り得ない！ なんだよ、その噂！ それを本気にする奴が居るのか！」

「本気にしなくても面白がって広める人は居るよ。実際、教師達の耳に入っているし」

「そんな嘘っぱちを本気にしてお前を叱る教師はバカだ！ 何でお前が怒られなきゃいけないんだよ」

「変な噂を流されるのは僕に『徳』が無いからだよ。上に立つ者は誰からも尊敬されるようにならないといけない。僕にはまだまだ足りないものが沢山あるんだ」

フェンリエルは謙虚だ。今回の妙な噂は、成績優秀で教師達の評価も高いフェンリエルを貶め様と考えた者達が流したに違いない。

「何でお前はいつもそうやって自分が悪いなんて言うんだよ。おかしいだろ？ 悪いのはお前じゃなくて嘘の噂を流す奴だ」

「噂を流す方も悪く無い訳じゃないけど、やっぱり、僕がしっかりしていればこんな事にはならないと思うんだ」

「それは違う。お前は悪くないって」

真剣な顔でフェンリエルを擁護するアスベエルは言葉を続けた。

「俺は噂を流した奴を絶対に許さない」

「アス、そんなに怒らなくても……。きっと悪戯半分だよ」

「大事な親友を馬鹿にするような噂を流されて黙って居られるかよ！」

憤慨するアスベエルにフェンリエルは優しい笑みを向けた。荒ぶる者を鎮める笑みだった。

「ありがとう、アス。僕、アスのそういう所、好きだよ」

少しはにかむようなフェンリエルの笑みにアスベエルは一瞬、言葉を失った。照れずには居られなかったのだ。

「な、なんだよ。当然の事だろ？」

若干、頬を赤らめたアスベエルは鼻の頭をカリカリと搔いてからフェンリエルの手首を掴んだ。

「い、行くぞ、フェン！ 授業に遅れるだろ！」

「そうだね。あ、でも、その前に……」

「その前に？」

「ロベッジの種入りのマフィン、食べない？」

「マフィン？」

「ライシエルがくれたんだ。『愛の植物と言われるロベッジの種入りだから、熱くなり易いアスベエルも少しは優しくなるんじゃないかな』って言った」

「な、なんだって！」

「ほら、一口サイズだから」

フェンリエルがポケットから出したマフィンを見たアスベエルは口を真一文字に結んで首を左右に振った。

「絶対、食べてやらない！ アイツ……また俺を馬鹿にして！」

「食べようよ、アス。折角、くれたんだから。僕一人じゃ食べきれないし」

「要らねえ！ 絶対、食べない！」

礼拝堂を出た二人はそんな遣り取りを続けながら空に舞い上がった。

純白の翼をはためかせて空を舞い、教室に向かう二人を鐘の音が包む。

光溢れる空で戯れる特別士官候補生達の姿はとても美しく見えた。

今日最初の授業は実戦を視野に入れた実技訓練だった。

手にした武器で戦闘を続けながら精霊達を操る練習だ。上級者ともなれば指を動かすだけで風を生み出し、吐息を吐くだけで空気を焦がしながら氷の刃を降らせる事ができる。

複数の事に意識を向け、集中力と精神力を切らさぬようにしながら敵を倒す策を考える。体が自然に動くようになるには、とにかく場数を踏み、経験を積むしかない。戦場に出る前段階の訓練だ。

校舎と校舎の間、丘陵地帯の草原で特別士官候補生達は教師の指導の元で自分の術の腕を磨いていた。

「へへへ。今日は調子がいいや」

アスベエルは鼻で笑って腕を大きく振った。宙に魔法陣を描き、歌うように精霊達に呼びかける。

手にした剣を操りながら風の精霊達を集めていた。直ぐにアスベエルの周囲に不可思議な風の動きが起こった。

「随分と滑らかだね。相性が好いみたい」

傍でフェンリエルが褒めた。

「まあ、な」

得意そうに笑うアスベエルの周りを複数の小さなつむじ風が囲んでいた。アスベエルの動きに合わせて刃と化した風が次々と巻き起こる。

まだ指先ひとつで風の精霊達を呼び出せる程ではないが、剣を振るっていても術を保つ事はできていた。攻撃態勢のままフェンリエルと会話する余裕もあった。

「凄い、凄い。今日もアスベエル様はとても優秀でいらっしゃるう」

アスベエルとフェンリエルの後ろから嫌味な声がした。

ヒューヒューと冷やかすような口笛も続く。

「！ あ、アイツら！」

振り返ったアスベエルがギリッと奥歯を噛みしめた。

アスベエルの視線の先に居たのはブラウンの癖毛と深い藍の瞳が特徴的な長身の生徒ガルディエルだ。彼の両脇には常に何かを食べている太ったジルヴェルと授業中は殆ど寝ているサクティエルが居た。

皮肉はパンを頬張っているジルヴェルが言い、口笛は寝惚け眼のサクティエルが吹いたものだった。ガルディエルは意味深な笑みを浮かべて立っている。

ガルディエルの両親は天使軍の上位士官という噂で、彼自身も優秀な生徒だ。だが自信過剰で高飛車、傲慢とも言える性格が彼を悪い意味で目立たせていた。

「駄目だよ、アス！ あの三人の挑発に乗っちゃダメ！」

不安げな表情のフェンリエルが小声で言った。

アスベエルは小さく頷くと口を真一文字に結び、視線を外した。だが、三人の嫌がらせは続

いた。

「成績優秀で素行に一点の曇りも無い……ハズのお二人は今日も仲良く真面目に授業を受けていらっしゃる。何か特別な訓練でも狙っておられる？」

耳にまとわりつくような声が厭らしい。ジルヴェルの言葉はアスベエルの神経を逆撫でするだけでは無かった。

「特別な訓練って、まさかフェンの噂はアイツらが？」

アスベエルの金瞳が怒りに染まった。フェンリエルが慌ててアスベエルの腕を掴んだ。

「ちょっと！ アス！ 駄目だよ！」

「止めるな、フェン！ お前に関する嘘の噂を流したのは絶対アイツらだ！ アイツら以外、考えられねえ！」

「そ、そんな！ 証拠も無いのに決め付けちゃ駄目だよ！」

「絶対そうだ！ 何でいつもいつもフェンに嫌がらせするんだ！ フェンは何も悪い事してねえのに！」

そう言い終えたかと思うとアスベエルはフェンリエルの静止を振り切って軽やかに地を蹴った。

一瞬だった。

風の精霊達を引き連れたアスベエルが剣を構えてガルディエルに突っ込んで行く。

「うわあ！」

ガルディエルの脇に居たジルヴェルが尻餅をついた。サクティエルはこうなる事を予測していたのか、一足先にガルディエルから離れて木に寄り掛かっていた。

「アス！」

フェンリエルの静止も虚しく喧嘩が始まった。

アスベエルは風の精霊を、ガルディエルは氷の精霊を呼び出している。キラキラと輝くダイヤモンドダストの中で二人は真剣を手に格闘を始めた。

「喧嘩だ！」

「本気だぞ、あの二人！」

「早く止めないと！」

「やっちなえ！」

冷やかす声と静止の声が飛び交う中、二人は地を蹴り、宙を舞い、純白の翼をはためかせながら本当にお互いを傷付けるのではないかと、と言わんばかりに剣を振るっていた。

長身のガルディエルは余裕の笑みを浮かべ、アスベエルは怒りの表情だ。

どう事態を收拾するか迷うフェンリエルの視線の先で、喧嘩は教師が止めに入るまで続いた。

「誰が対戦しろと言った！」

二人の間に鋭い斬撃が割って入った。

流石、特別士官候補生と言おうか。教師の横槍を見事に避けて後退した二人だったが、まだまだ未熟なのは否めない。風の精霊と氷の精霊は一瞬で消し去られていた。

宙で静止した二人は教師に招かれ、ゆっくりと地に足を着けた。

「どっちが先に手を出した」

周りに居た生徒達がアスベエルを指さした。ガルディエルの唇の端が吊り上がる。それを見たアスベエルに怒りがよみがえる。だが、教師の一瞥がその怒りを一蹴した。

「おい、アスベエル。お前は どうしていつも そうなんだ。喧嘩の原因は常にお前にあるじゃないか」

「先に喧嘩を吹っ掛けて来たのはアイツなんだよ！」

抗議も虚しく、教師の拳骨はアスベエルの頭に落ちた。アスベエルは目尻に涙を浮かべ、頭を抑えた。

ガルディエルは腰に手を当て、涼しい顔で首を左右に振った。その顔は明らかにアスベエルを嘲笑っている。

「アスベエル、罰として正門から礼拝堂まで十往復だ」

「な！ 何で俺だけ！」

教師が指先を鳴らした。ジャラリと音がしてアスベエルの両足に鎖が巻き付いた。鉄球付きのそれは異常に重い。

ジャラジャラと音がする足を引き摺りながらアスベエルは唇を尖らせ、渋々校庭を後にした。

「僕も一緒に走るよ」

フェンリエルがアスベエルに並んだ。

「何でお前が走るんだよ」

「だって……アスがこんな目に遭ったのは僕のせいだから。ゴメンね」

「喧嘩を仕掛けたのは俺だ。お前は関係ないって」

フェンリエルは首を左右に振ってアスベエルに付き合った。

学校は湖から続く丘陵に建っている。礼拝堂が一番高い位置にあった。高低差の激しい長い十往復だ。

「アスは多分、正しいよ」

「え？」

暫く無言で走っていたフェンリエルが言った。額に汗を浮かべたアスベエルがフェンリエルの顔を見た。

「噂を流したのはガルディエル達だと思う」

「そうだろ！ 絶対そうに違いないんだ！」

同意を得て俄然、強気になったアスベエルをフェンリエルは窘めた。

「あの噂は僕を的にしているんじゃないくてアスを標的にしているんだと思う」

「は？ 俺を？」

「噂を流したのがガルディエルだと気付いたらアスは必ず彼を攻撃する。ガルディエルはそこまで計算していたんだと思う。計算どおりアスは喧嘩を仕掛けちゃった。これでアスの素行の評価が落ちる」

「つまり……？」

「今度の『任務随行訓練』は戦闘必須の内容でしょう？ 選ばれるのは戦闘が得意な生徒だよ。」

僕よりもアスの方が選ばれる可能性が高い。ガルディエルのライバルになるのは僕じゃなくてアスだ」

「何だよ。じゃあ、フェンをからかいながら実は俺を狙った嫌がらせだったっていうのか？」

「そうだと思う。アスの優しさを逆手に取ったガルディエルの嫌がらせ……ゴメンね。僕が至らないばかりにアスが……」

フェンリエルの瞳に涙が浮かんだ。

「泣くなよ。フェンは悪くない。喧嘩を吹っ掛けたのは俺だ。噂を流したのはガルディエルだ。お前は何もしてない」

額の汗を拭いながらアスベエルは首を左右に振った。

「でも、なんか悔しいぞ！俺も悪かったけど諸悪の根源、ガルディエルの奴が何の罰も受けないなんて間違ってる！」

ゼエゼエ言いながら礼拝堂まで辿り着いたアスベエルは正門まで続く長い歩道を見下ろしながら溜息を吐いた。

「悔しく無いって言ったら嘘になるけど……多分、赦すしかないんだと思うよ」

「赦す？ 何で赦せるんだよ！」

「ほら、そうやってカッとなって怒りを露わにするから喧嘩になるんだよ。アスや僕に嫌がらせをするのって、ガルディエルに対抗心とか嫉妬心があるからでしょう？ そういう心は向上心に変えていかなきゃいけないもの。ガルディエルはそれができていないんだ」

「未熟な奴！」

「僕達だって未熟だ。僕達が尊敬される天使だったらガルディエルは嫌がらせなんかしてこない。僕達を取るべき行動は仕返しじゃなくて、相手を赦し、自分自身を高める為に考え方と行いを改める事だよ」

「んな事、言ったって……」

「ほら、神はどんな行いをした人間でも赦して救うでしょう？ 僕達は神に仕える天使だ。僕達が赦せなくてどうするの？」

ね、とフェンリエルは笑みを作った。

アスベエルが口を噤む。

「……フェンの優しさには負けるよ」

「僕はアスの人の好きに負けるよ」

二人は顔を見合わせて笑った。

「しかし、何でアイツ、俺にだけ嫌がらせするんだ？ 俺以外にも優秀な奴、居るだろ？」

「それは多分……」

「何だよ？」

「アスは覚えてないの？ 特別士官候補生になる為の試験で、ガルディエルと素手で格闘した事」

「……そんな試験、あったっけ？」

「格闘試験でアスはガルディエルの自慢の顔に痣を作っちゃったんだよ。その事を根に持ってる

んだと思う」

記憶に無い、とアスベエルは首を捻った。

「小っちゃ奴だな」

「相当、プライドを傷付けられたんだと思うよ、ガルディエルは。確か、一週間くらい学校に来なかったし……」

フェンリエルは苦笑した。傷のひとつやふたつ、どうこう言うものではないというアスベエルには理解できない感情なのだろう。首を捻るアスベエルは本当に覚えていない様子で目を数回瞬いた後、首を振った。

「ま、いいや。それより、さっさと十往復済ませよう」

「そうだね。疲れたら途中でロベッジの種入りのマフィン食べようよ」

「それ、いいな」

「あ、食べるんだ」

「食べてやるんだよ！」

へへへと笑いながら言ったアスベエルはジャラリと音を立てる鎖を一瞥した後、走る速度を上げた。

金属音が響く中、二人の天使が走って行く。

宙を舞う風の精霊達が真面目な天使達を優しく包み、その背をそっと押していた。

空を染める光の色が変わった。士官養成学校の一日の終わりが近付いていた。

一足早く授業を終えた生徒達が帰路についていた。校舎から外へ出る者、空へ舞い上がる者、湖に浮かぶ銀の舟に腰をおろす者など様々だ。

そんな様子を見下ろす者が居た。学校長だ。

礼拝堂に並んで建つ時計塔の最上部にある部屋の窓から外を見ていた学校長は鼻に掛かる丸い眼鏡のズレを直した。

「久し振りに『任務随行訓練』の話がある。それだというのに何と緊張感の無い事か」

誰かと話している様な口振りで学校長は言葉を続けた。

「天魔大戦直後は士気高く、誇り高き軍師を志す天使で溢れたこの学校も、今となっては遊び半分で行く平和呆けた天使達の娯楽の場だ」

溜息交りに行った学校長は開け放った窓辺から離れ、古い木製の机の脇にある椅子に腰を下ろした。

「向上心を忘れ、己を戒める事を忘れ、食と淫の欲を隠さず、嫉妬と羨望の眼差しで友を見る……。そんな者達ばかりだ。まるで小悪魔の集会ではないか」

怒りを乗り越え、呆れと諦めに満ちた呟きに言葉が返された。

「随分と気分を害されている様ですね、校長」

返事は窓辺からだった。

誰も居なかった窓辺に白い羽が数枚、フワリと落ちた。淡い紅の長い髪を揺らす天使が現れ、窓に腰を下ろした。

「そろそろ空気を引き締める必要がある。どうだ？ 『適任者』は居るか？」

校長の言葉に窓辺の天使が笑った。

「『適任者』ですか。物は言いようです。『神の罰を受けて追放されねばならぬ者』は居るか、と仰ればよいものを」

「軽々と『神』と言うな。どうなんだ？」

「そうですねえ……。皆、とても『イイ子』ですよ」

フフフと笑いながら窓辺の天使は校長に頷いて見せた。校長の表情が曇る。

「何の為に前回は学校内をうろついている！ ふざけた報告は必要無い。天使として相応しく無い者、危険な思考の者は居るか、と聞いている。さっさと密偵としての定期報告をしろ」

怒気をはらんだ校長の言葉に窓辺の天使は肩をすくめた。

「考え無しの平和ボケしたボウヤやお嬢ちゃん達は沢山居ますが、特筆すべき危険因子は無いですよ。……今の所は、ね」

最後の言葉に何やら含みを持たせた様な言い方をした後、彼は部屋に入った。

コツコツと靴音を立てて校長の机に近付きながら背中の白い翼を揺らす。

「大いなる目的を持たない者達に、大戦の時に皆が抱いた強い意志を持ってと言う方が無茶なんです。いつ訪れるとももしれない危機……。否、二度と訪れないかもしれない危機に備えよ、と命じ

る方が無茶だ。小さな嫉妬心、羨望、甘い恋心やそんな錯覚から生まれる情欲なんて大した罪じゃない」

古く分厚い書籍が並ぶ壁の棚の前に立った天使は優しい笑みを浮かべながら言った。

「神の御心に背けるような強い意志を持つ者なんて、そう居ませんよ。そんな強い意志の天使なんて、ね」

「……強い意志を持たぬ天使というのも考えものだが」

眉を顰めた校長は大きな溜息を吐いてから手を払った。出て行け、と言っていた。

「お邪魔しました」

魔術書の背表紙を指先でトントンと叩いてから淡い紅の長い髪を揺らす天使は窓辺へ戻って行った。背の四枚の翼を揺らし、フワリと外へ出て行く。

「あ、そうだ」

時計塔から少し離れた後、彼は校長の部屋へ舞い戻った。

「校長、お茶がお好きでしたね？」

窓の外、宙に止まったまま彼は笑顔で言った。

「『獅峰甘露』はお持ちですか？ 少し分けて頂けると嬉しいのですが……」

時計塔に掲げられた大きな時計の針がカチリと動いた。

それに合わせて礼拝堂の鐘が鳴った。

士官養成学校のあちらこちらから賑やかな声が響き始めた。今日、一日の授業全てが終わったのだ。

天使達が思い思いの場所へ散って行く。

そんな様子を見下ろしながら、淡い紅の長い髪を揺らす天使は笑顔で時計塔から離れて行った

。

アスベエルとガルディエルの喧嘩騒動から数日後――。

校舎の外にある連絡用掲示板の前に人だかりができていた。

キューピット達が戯れる噴水の中に浮かび上がる一枚の通知文が注目の的だった。

「『任務随行訓練』のお知らせ。訓練参加人数二名。参加者は特別士官候補生の中から選定。選考期間は明日から二週間。選考者は学校長を始めとする教師十名。選考基準および訓練の内容は……」

噂通り、人間界に降りて悪魔に憑りつかれた修道院を浄化する訓練内容だった。

背伸びをしながら内容を見たアスベエルは一緒に居たフェンリエルの顔を見た。

「参加者二名、明日から二週間、素行だの成績だの色々チェックされるみたいだ」

「何だか落ち着かない二週間になりそうだね」

フェンリエルの表情が翳る。アスベエルの事を心配しているのだ。

「そんな顔するなよ。もう喧嘩なんかしねえよ」

「うん。でも、アスにその気が無くても彼等が何か仕掛けてきそうで……」

「その時はその時！ 二度と手出しして来ない様に俺がぶっ飛ば……」

拳を握りしめたアスベエルは途中で言葉を止めた。しまった、とでも言うように手を口に当て、フェンリエルを横目で見ると、

「アスはもう、本当に……」

「ゴメンゴメン。え……っと……赦すんだったっけ？」

「そうだよ。赦すんだよ。それができればアスも僕も一皮剥ける。ひとつ成長できるんだ」

「そ、そうだったな。精神的にも大人になるんだった」

「大人に、ね」

頭の後ろを搔いていたアスベエルはフェンリエルに手を引かれてその場を離れた。

「フェン」

「なに？ アス」

「お前って良い友達だ」

「急にどうしたの？」

噴水の周りを飾る黄色い花の小道を歩きながらアスベエルはフェンリエルの手を見ながら言った。

「俺は直ぐに頭に血が上って拳が出る。でもお前はいつも冷静で、その手で俺を優しく止めてくれる。お前って、俺に足りない物を持ってるよな」

「それを言うなら、僕に無いものをアスは持ってるよ」

「二人一緒になれば最強だな。お互い、足りない物を補い合えば最強だ！」

へへへと笑うアスベエルを見たフェンリエルは照れ臭そうに頷いた。

「最強ではないと思うけど、補完し合えるのは素敵な事だと思う」

「ずっと一緒だぞ。俺達は最強コンビでずーっと一緒だ！」

「そうだね。ずっと一緒だといいね」

得意そうに頷くアスベエルを眩しそうに見詰めたフェンリエルはフッフと声に出して笑うと花の周りを舞う蝶を見ながら言葉を続けた。

「ずっと一緒に助け合っていけるといいね。何があっても心強いよ」

「約束する。俺はフェンとずっと一緒に居る」

まるで宣誓するかのように言ったアスベエルだったが、突然、花の中から伸びて来た腕に驚いて後退った。

「な、ななな何だ！」

黄色い花の中から生えた腕にフェンリエルも驚き、アスベエルの後ろに隠れた。二人は息を飲んでじっと腕を見詰めた。

「はいはい、はい！ この私も素敵な友情の中に混ぜて欲しいんだけどいいかな」

「ラ、ライシエル！」

腕の主はライシエルだった。今日もまた、制服を着てこっそり学校に紛れ込んでいたらしい。

アスベエルは花の中に現れたライシエルの胸元を指さしながら頬を膨らませて言った。

「また勝手に学校に侵入しやがって！ 花の中に寝転がって何やってんだよ」

「噴水の前に沢山の可愛いコが集まっていたから、どのコに綺麗な花をあげようか迷っているうちに寝てしまってね。丁度、目が覚めた時に君達の素敵な告白が聞こえたから、つい邪魔したく……いや、私もその輪に混ぜて欲しくて手を伸ばしたんだ」

淡い紅色の長い髪を揺らしながら立ち上がったライシエルは手近な花を二本手折ると、アスベエルとフェンリエルに差し出した。

「とっても素敵な友情だよ。お互いを認め合い、切磋琢磨するなんて最高の青春じゃないか。恋の予感がするよ」

「こ、恋？」

「そう思わないかい？ フェンリエル」

ニコリと笑うライシエルに苦笑して見せただけでフェンリエルは何も答えなかった。アスベエルは、といえば呆れ返って首を左右に振っている。

「お前ってどうして直ぐ恋愛話になるんだ？ 頭の中、花咲いてんじゃねえの？」

「何色の花が咲いていると思う？ きっと、どんな花にでも寄り添える純白の可憐な花だね」

「うわ！ 似合わねえ！」

露骨に嫌な顔をしたアスベエルに、ライシエルはニッと意地悪い笑みを向けた。一步アスベエルに近付いてから小さな声で話し始める。

「そんな酷い事を私に言ってもいいのかな？ 私に何をお願いしたか忘れた？」

制服の懐をポンポンと叩きながら言うライシエルを見たアスベエルはアッ！ と声を上げた。

「お、お前、まさか！」

「そう、そのまさかだよ」

「も、もう『獅峰甘露』を手に入れたのか！」

あんぐりと口を開けるアスベエルの目の前に小さな紙袋が差し出された。「獅峰甘露」と書か

れた紙包みだった。

「す、すげえ！ ほ、本物？」

「勿論、本物だよ。早く欲しいだろうと思って努力したんだよ。苦労したんだからね」

ゴクリと喉を鳴らした後、アスベエルは姿勢を正し、表情を引き締めてライシエルを正面から見た。そして躊躇無く深々と礼をし、頭を下げたまま言った。

「ありがとう！ 俺なんて何をどうすればいいのか全然解らなかったのにお前って凄い。俺の為に……本当にありがとう」

「あれ？ まだ『あげる』なんて言ってないのに、お礼なんて言っているの？」

「へ？」

貰う気満々でいたアスベエルの口から間の抜けた声が漏れた。

「そ、それ、俺にくれるんじゃないの？」

「欲しい？」

「そ、そりゃ……勿論」

「じゃあ、何してくれる？」

「な、何って……」

本気で言葉に詰まるアスベエルの唇をライシエルが指先で撫でた。

「夜から次の次の次の夜まで、ずっと私と一緒に居てくれるかな？ お風呂の中も、ベッドの中もずっと一緒に。……意味解るよね？」

蠱惑的な言葉にアスベエルは耳まで真っ赤になった。

「そ、そそそそそ」

「そんな事、できない？」

ライシエルがお茶の紙包みをスッと引いた。アスベエルが「アッ」と声を出す。

「どうする？」

「……わ、解った。お、お前の言う通りにする」

そう言い終えたアスベエルは頭から湯気が立ち上るほどに赤くなっていた。

「プッ！」

聞こえたのはフェンリエルの笑い声だった。堪え切れなくて吹き出したのだ。

「な、なんだよ！ フェン！」

「だって……アスったら、本当に真っ赤になっちゃって！」

ゴメンと言いながら笑うフェンリエルを見た後でアスベエルはライシエルを睨み付けた。アスベエルをからかった本人は涼しい顔で花を差し出している。

「あんまりにも可愛かったからつい、ね」

ライシエルはアスベエルの頭をポンポンと撫で、黄色い花をその髪に挟んだ。

「お前という奴は！」

「あ、駄目じゃないか、アスベエル。さっきフェンリエルと話していた事を忘れたの？」

「話していた事？」

「相手を『赦す』って事だよ。直ぐにカッとなるんじゃないかって相手を赦す気持ちを持つこと。そ

れが大事って話していたじゃないか」

ね、と微笑むライシエルを睨んだ後、アスベエルはサッと手を延ばして紙包みを取った。それをポケットに仕舞いながら軽く咳払いし、プイッと顔を背けて頷いた。

「ゆ、赦してやるよ。俺をからかった事も、ポンポンした事も！」

「それじゃあ、これからは心置きなくポンポンできるね」

「何だと！ それは違うだろう！」

「あ、酷い！ 折角の良き友人を叩くなんてアスベエル、酷いよ。お茶、返して貰おうか」

「それはできない！ 行くぞ、フェンリエル！」

アスベエルはバサリと翼を広げると、涙を浮かべて笑うフェンリエルの腕を掴んだ。

「逃げるなんて酷いよ」

泣き真似をするライシエルに手を振ると二人の天使は澄んだ空へ舞い上がった。

「サンキュー！ ライシエル！ お前も大事な友達だ！」

空からアスベエルは大声で言った。

仲良い金瞳と緑瞳の天使二人に手を振り返しながらライシエルはその姿が見えなくなるまで動かなかった。

「良き友人、大事な友達……。良い言葉ですね」

くすぐったそうに笑ってからライシエルはグルリと辺りを見渡した。多くの生徒達が屯している様子を見詰めながら花を手折り、クルクルとそれを指先で回す。

「良き友人達ばかりなら問題は起こらないのですがねえ……」

ライシエルの視界の端に三人の生徒の姿が写っていた。噴水の前に立ち、掲示板を見ているガルディエル、ジルヴェル、サクティエルの三人だった。

「高飛車で傲慢で冷徹。どんな事でも躊躇せず命令できるガルディエルが黙っていないでしょうね。卑猥な噂を暴飲暴食のジルヴェルが流した……。次動くのはサボリ魔のサクティエルでしょうか。素行が悪い彼は何をやらかしても平気でしょうからね」

先を案ずるように呟いたライシエルはクシャリと花を握り潰した。ヒラリと花弁が地に落ちて行く。

「どんな酷い仕打ちでも赦す心……。それは本当に大切ですよ」

ライシエルの瞳が鮮烈な蒼の輝きを帯びた。

一瞬だったが鋭い視線となったライシエルは誰かに言い聞かせる様に呟いた後、手を振って朽ちた花を振り落した。

コツリコツリと靴音が響く。

その響きはどこか不穏な空気を纏っていた。

任務随行訓練の詳細が発表されてからというもの、少しでも可能性があると思う者達同士の静かなる戦いが水面下で勃発していた。

表面上はいつもと変わらないのだが、その胸の内には激しいライバル心・闘争心が秘められていて目に見えない火花が常に散り、学内は異様な緊張に包まれていた。

「……僕、この緊張感、好きじゃない」

廊下ですれ違う同級生達と挨拶を交わしたフェンリエルが隣に居るアスベエルに囁いた。

明らかに選抜を意識している、という生徒はまだ良い。特別なライバル心を見せずに「応援している」という態度で対応すれば害はない。

しかし笑みの奥に野心を秘めた者は厄介だ。他愛無い会話であってもそのライバル心に油を注いでしまう事がある。

「俺も苦手だ。今更足掻いた所でどうなるもんでもねえのになあ。何でこの時期になると皆ピリピリするんだ？」

「あんまりそういう事言うと『余裕だね』って皮肉を言われるよ」

「余裕とかそういうんじゃないけどなあ」

いつもと調子が変わらないアスベエルは理解できない、とでも言うように頭の後ろを掻きながら首を捻った。

「この数日の態度だけで選ばれるんだったら解るけど、これまでの成績とか素行とかが基準になるんだ。こういう時にだけ何かやったって『エサを撒かれなけりゃ、その気にならない奴』って思われるだけだろ？」

「エサを撒かれても動かない人も居るんだし、そういう人達よりはいいんじゃないかな？」

「まあ、そりゃ、そうだろうけど」

すれ違う教師に向かって深々と頭を下げて挨拶をしたり、熱心に質問をぶつけて勤勉さをアピールする生徒に呆れた眼差しを向けながらアスベエルは溜息を吐いた。

「ま、俺には関係ねえけど」

「アスは選ばれたって思わないの？」

「訓練、参加できるなら参加してえけど、だからって何かしろって言われてもなあ。これをすりゃ選ばれるって確かな方法があるなら努力はする」

「アスらしいね」

クスクスと笑うフェンリエルに向かってアスベエルは真面目な顔を向けた。

「ただ、お前が選ばれたら俺は何が何でもついて行く。どんな手段を使っても一緒に行くからな」

「え？」

足を止めたフェンリエルに向かってアスベエルは小さく頷いて見せた。

「お前ひとりを危険な目に遭わせられねえ」

「何言ってるの？ 僕が一人で任務を遂行する訳じゃないんだよ」

「そ、それはそうだけど……」

「……ありがとう、アス。多分、僕は選ばれないけどもし選ばれたら……」

「選ばれたら？」

「僕は辞退して君を推薦するよ、アス」

「……フェン」

「僕は軍属は目指すけど最前線で戦うんじゃないなくて、少ない犠牲で勝利を得られる様な策を考える側に居たいんだ。……あ、決して安全な場所で高みの見物をしたって事じゃないからね」

「解ってる。フェンはそんな奴じゃないことくらい解ってるって」

アスベエルがニッと笑った。

「フェンが作戦練って俺が指揮を執る。そんな日が来るといいなって思った」

「二人でひとつだね」

「ああ！」

笑顔でお互いの顔を見詰め合った後、アスベエルはフェンリエルの肩をポンと叩いた。

「じゃ、俺、特別選択講義受けて来るから」

「そうだったね。僕は今日は講義終わりなんだ。礼拝堂か図書館で本を読んでから帰るよ」

「……図書館は止めとけ。あんな噂流されたんだぜ？」

「うふふ。アスは随分根に持ってるね。解った。礼拝堂にするよ」

「それじゃ」

「うん」

アスベエルが実戦闘技場へ向かった。

それを見送ったフェンリエルはアスベエルに言った通り礼拝堂へ向かった。静かな礼拝堂は読書にもってこいの場所だ。綺麗なステンドグラスもフェンリエルのお気に入りだった。

礼拝堂は、朝の礼拝の時間には生徒達が大勢集まるが放課後は静かなものだ。

奥の控室に教師が居る場合もあるが、放課後は定例会議などがあるし、今は任務随行訓練の選考期間中だ。控室で呑気にお茶を飲んでいる教師は居ない。

「さて……」

フェンリエルは図書館から借りた分厚い古書を広げた。毎日決まった時間に自動で鳴り始めるパイプオルガンの美しい音色を聞きながらフェンリエルは誰にも邪魔されない読書の時間に没頭した。

パイプオルガンが奏でる讚美歌が響く中、フェンリエルにとっての至福の時間が流れる。

だが、それは長く続かなかった。

一人の生徒が礼拝堂の扉を開けて入って来た。

コツリコツリと足音を立てて彼はフェンリエルに近付いていく。

手が届く距離まで彼が近付いて初めてフェンリエルは顔を上げた。

「……サクティエル」

何か用？ と首を傾げるフェンリエルに向かってサクティエルは気怠い表情に僅かな笑みを浮かべた。

「ちょっと遊べよ。俺と」

その言葉の意味をフェンリエルが理解する前にサクティエルは動いた。

フェンリエルの細い体が礼拝用の長椅子に押し倒された。固い木製の椅子の上で状況を理解できずに身を強張らせるフェンリエルに向かってサクティエルは欠伸をした後に言った。

「噂通りの事を俺としようぜ。イイ気持ちにしてやる」

「え？」

「可愛く鳴けよ。泣いてもいいぜ。どうせオルガンの音で誰にも声は聞こえやしねえ」

フェンリエルの制服のボタンが宙に舞った。ビリビリと布が破られる音が響く。

「や、止めて！」

「嫌だね」

フェンリエルの至福の時間が、サクティエルにとっての悪趣味な嗜好の時間へ変貌する。

「綺麗な肌してんなあ。アスベエルとはやったのか？」

「な、何を！」

「ナニをするんだよ。ほら、股開けよ」

パイプオルガンの旋律が速くなった。激しい雷雨が空気を震わせるような音にフェンリエルの悲鳴が掻き消される。

サクティエルの低い笑い声がオルガンの音色に混ざる。

淫靡な空気が礼拝堂に漂い始めた。

特別選択講義の実技訓練を終えたアスベエルは剣を手に、汗をタオルで拭きながら伸びをした。

「体動かすと気持ち良いな。やっぱ、俺は武闘派だ」

へへへと笑うと剣を背に負い、フェンリエルを探して礼拝堂へ向かった。

外は陽が沈みかけていて、空には見事なグラデーションが浮かび上がっていた。

風が少し冷たくなってきている。アスベエルは充実した一日を終えた満足感に気を良くしていた。

実戦闘技場から礼拝堂まで少し距離がある。

バサリと背の翼を広げ、空に舞い上がったアスベエルはパイプオルガンの演奏が終わっている礼拝堂に向かった。

鱗のような雲が広がる茜色の空をバックにした礼拝堂は何とも幻想的に見える。

もう直ぐ鐘が鳴るかな、などと思いながらアスベエルは礼拝堂の入口をくぐった。

「フェン！ 講義終わったぜ。何か一緒に食いに行こうぜ」

入口をくぐりながら言ったアスベエルは自分の声が虚しく響いたことに首を傾げた。礼拝堂には誰も居ない。

「？ 先に帰ったのか？」

首を傾げたアスベエルは踵を返そうとしてハッとした。

視界の端に白い残骸が写ったのだ。それは木製の礼拝用の長椅子の下に散乱していた。

「フェン！」

嫌な予感がした。

駆け寄ったアスベエルはそこに広がる光景に息を飲んだ。

長椅子に仰向けで倒れているフェンリエルは一糸纏わぬ姿だった。全身には無数の痣と傷が刻まれていた。

無惨に引き千切られた服は辺り一面に散乱していて、さっきまで行われていた暴行の生々し痕が残されていた。

「フェン！ フェン！」

失神しているフェンリエルを抱き上げ、自分の上着を着せたアスベエルは冷たくなった細い体を抱きしめながら何度も名を呼び続けた。

「……ア、ス？」

「フェン！ 大丈夫か！ 誰だ！ 誰にやられたんだ！」

アスベエルの声は怒りに震えていた。その体からは憤怒の気が立ち上っている。

「ぼ、くは……大丈夫、だよ」

細い声でフェンリエルは言った。泣きはらした目で力無く笑う様子にアスベエルの理性が飛ぶ。

「何が『大丈夫』だよ！ 誰だ！ こんな……こんな酷い事をやったのは！」

「駄目、だよ……アス、僕は大丈夫だから……」

聞き取るのが難しいくらい小さな声にアスベエルは全てを理解した。

犯人はアイツ達だ。そしてこれは自分に対する嫌がらせだ。挑発だと解っている。しかし許せなかった。

フェンリエルを木製のベンチに座らせ、自分の上着でその体を隠してからアスベエルは立ち上がった。

「絶対……絶対、絶対に赦せねえ！」

アスベエルは咆哮した。

明らかな憤怒と殺意を全身に纏い、背に負う剣の柄を握り締めて礼拝堂から走り出た。

翼を広げ、復讐の相手を探す。

目的とする者達は直ぐに見付かった。礼拝堂の直ぐ近く、時計塔前の広場にガルディエル、ジルヴェル、サクティエルの三人が屯していた。

アスベエルはガルディエル目掛けて高い空から一直線に舞い降りて行く。

「貴様ら絶対赦さねえ！」

アスベエルの咆哮に気付いた三人が動いた。ガルディエルはフワリと舞い上がって逃げ、ドーナツを食べているジルヴェルは背を向けて時計塔の陰に隠れた。

サクティエルだけが逃げなかった。だるそうに顔を上げた彼は殺意を込めたアスベエルの視線を正面から受け止めると唇の端を僅かに吊り上げた。アスベエルの怒りの理由を認めた笑みだった。

「サクティエル！」

全てを引き裂く刃を纏う風の精霊達がアスベエルを囲んだ。

半透明の彼女達は悲鳴に近い声を上げながらアスベエルの命令に従い、サクティエルの全身をズタズタに引き裂いた。

サクティエルが避けなかったのか、アスベエルの術の腕が見事だったのか。

いずれにせよ、風の精霊達の刃を受けたサクティエルは血煙に包まれた。

「ウオオオオオ！」

自分の術が命中しても気が治まらないアスベエルは振り抜いた剣を天高く掲げ、サクティエルの脳天目掛けて振り下ろした。

「チッ！」

サクティエルが転がって避けた。血の跡が石畳に残る。

地に降り立ったアスベエルは勢いそのままに、武器を持たないサクティエルに斬撃を食らわせようと剣を上下左右に振り回す。

「俺は、俺は……俺は貴様を絶対に赦さない！」

「何の事だ？ 俺は……何もやってねえぜ？」

「ふざけるな！ 貴様なんか、貴様なんか、天使でもなんでもねえ！ 俺が成敗してやる！」

ヘラヘラ笑いながらサクティエルは笑っていた。反撃しないのが不自然だったが、アスベエルに考える余裕など無かった。

特別選択講義の実技訓練を受けたアスベエルの体は無駄の無い攻撃を容赦無く繰り出す。それは次々とサクティエルに命中し、サクティエルの顔から余裕の笑みが消えた。本当に命の危険を感じ始めたらしい。

「駄目だよ、アス！ 止めて！」

悲鳴に似た懇願の音が辺りに響いた。

アスベエルの上着一枚だけを身に付けたフェンリエルが翼で身を隠しながらアスベエルに向かって叫んでいた。

細い肢体を震わせ、よろけながら必死に何度も制止の声を上げていた。

しかしアスベエルの剣は止まらない。

それは確実にサクティエルの命を断とうとしていた。

「止めんか！」

地鳴りの様な低い言葉と、万人の背筋を凍らせるような闘気が場を支配した。

雷に打たれたような衝撃に襲われたアスベエルは、脳天から地まで串刺しにされたように動けなくなった。

「こ、校長」

時計塔の上に長い杖を持った学校長が立っていた。礼拝堂近くの時計塔には学校長の部屋がある。

アスベエルは学校長の目の前で同級生に対して殺意を剥き出しにしていたのだ。

ドサリと音がした。

血塗れのサクティエルが倒れた音だった。石畳の上に血溜まりができ、それが広がっていく。

「仲間殺しとは何事だ！」

腹の底に響く校長の厳しい声と共に、地割れの音が響いた。

激しい揺れが一帯を襲い、石畳が縦に割れ、砕けた石が四方八方へ散乱する。

地の底から巨大な十字架が現れた。地の底から断末魔の声が空へ抜けていく。この世の苦痛全てを味わう者の叫びに似ていた。

「う、うわああ！」

アスベエルを無数の腕が襲った。

意志を持つそれは時計塔の前に立った巨大な十字架にアスベエルを磔にした。

「ア、アス！」

血色に染まった空をバックに、巨大な十字架が時計塔の前に立った。

そこに磔となったアスベエルは身動きひとつ許されず、ただ、叫ぶ事しかできなかった。

「ちくしょう……ちくしょう！ 何で俺が磔になるんだ！ 何で俺が裁きを受けなきゃいけないんだ！ おかしいだろ！」

「アスー」

フェンリエルの悲痛な叫びが辺りに響く。

断罪の時間が迫っていた。

「天腹身息お磔通花磔だお急自ア何助癒急そてガあ遠何腕さコどア反た…うだ複卑なアら俺げえア根俺るサ
使の動をいと常やと。俺何がツベかてのでだるデたき事服なツどべしな」動だので何べサ気か」べ体最だテ
ア底き飲！なの緑な俺何がツベかてのでだるデたき事服なツどべしな」動だので何べサ気か」べ体最だテ
スに一んっ講にっ…歩何をエのく術！っい。にををがうエたんかが天姑だエク持ちらエを初、エ
ベ響つだサた義困た…もを、ル天れが得も胸言ルにてるクガをてはが言もは達なてはイ良務はし意てル
エく取。ク十はまアこ退し俺の使！得も胸言ルにてるクガをてはが言もは達なてはイ良務はし意てル
ル声れテ字とれスのいよは視が意うポっの乾いんテルしっ言「えの青に手？サエく礼行絶て味俺が
よがなイ架ったベ手たう…線彼こな、ケて言燥ただイデたて葉サやの白介を」クル礼行句いがは一
、天いエのく校エで視と…の等の奴虫ツた葉し天、エイん…にクし、く抱使テを拝訓したフらね、
両かアル上到庭ルア点し殺先のまはのト事をた使アルエだ…詰テナいも身れじエ詰でを。エなた言
のらス！か終でをイでてしで元ま居息をが間白達スのルよそまいい言をなゃルめ寝諦。ソリっそを
目降ベらわ談指ツ状い、ガへじなな見あいいのベ血は！れっエ。え起がねの言。いるてエたし切
をっエ目はっ笑さ…をの？デけサかだくた天にかル汚ス俺…が抛なすサか。葉のたよフルのいらた
してルを周てしし…見か」イ寄ク！」れ」使似ら！しべの…。アのク。の意突ガン顔く…皆
っ来は開困いてた」せ。エッテ」！のた「」たエ大」フは何一りつエ無ルとのは拒らず聞キエ説
かる何けのるいり、よ子間彼口！がだ等をられ何ヴエルが入っクテい故ル。どうし暴行目撃のだした
り。とろ様時た、けのるいり、よ子間彼口！がだ等をられ何ヴエルが入っクテい故ル。どうし暴行目撃のだした
と。かよ子間彼口！がだ等をられ何ヴエルが入っクテい故ル。どうし暴行目撃のだした
開磔！がだ等をられ何ヴエルが入っクテい故ル。どうし暴行目撃のだした
く。かよ子間彼口！がだ等をられ何ヴエルが入っクテい故ル。どうし暴行目撃のだした
が。かよ子間彼口！がだ等をられ何ヴエルが入っクテい故ル。どうし暴行目撃のだした
い。かよ子間彼口！がだ等をられ何ヴエルが入っクテい故ル。どうし暴行目撃のだした
い。かよ子間彼口！がだ等をられ何ヴエルが入っクテい故ル。どうし暴行目撃のだした
。かよ子間彼口！がだ等をられ何ヴエルが入っクテい故ル。どうし暴行目撃のだした
。かよ子間彼口！がだ等をられ何ヴエルが入っクテい故ル。どうし暴行目撃のだした

「お濃い霧の待てよ！引っ張るなっ て！！」
 阻ま濃霧の相手中でよ！スべエラ張の身なっ て！！」
 「自分分だフケン！を逃れの姿も霧には紛れ、時計塔の周辺に静寂が言
 「フアエスガ…悲塔がど晴夜でい叫びも時る顛末を指示
 「や…計れがど頂うでいれに事うの結末を指示
 「それがど頂うでいれに事うの結末を指示

「溜。た立。に。る。ペ。手。合。ど、
は。し。イ。り。だ。に。の。い。け。ど、
ル。が。バ。た。る。う。ル。通。だ。け。の。よ。く。先。工。な。ず。確。が。エ。ら。い。込。り。で。そ。
エ。気。ヤ。る。の。言。た。よ。エ。を。」 変。だ。し。ん。う。は。か。ス。じ。少。も。エ。ス。う。い。踏。く。に。や。の。た。口。っ。何。に。あ。れ。
べ。る。茶。の。目。と。っ。さ。っ。言。と。え。い。っ。し。エ。そ。の。中。エ。ン。と。た。を。一。…。を。遠。く。に。死。性。で。軽。い。そ。だ。の。天。た。
ス。れ。苦。い。目。と。っ。さ。っ。言。と。え。い。っ。し。エ。そ。の。中。エ。ン。と。た。を。一。…。を。遠。く。に。死。性。で。軽。い。そ。だ。の。天。た。
ア。わ。茶。を。使。失。ア。け。さ。っ。言。に。た。う。が。れ。風。る。ン。だ。義。入。頭。ル。フ。子。の。寄。校。や。て。視。線。は。て。て。っ。い。い。も。い。る。情。
ら。救。滅。っ。の。天。を。が。だ。到。だ。と。エ。ま。う。れ。エ。講。に。の。ジ。たい。い。を。探。し。…。な。ル。ハ。は。て。て。っ。い。い。も。い。る。情。
が。、。残。る。は。力。手。触。周。ル。く。エ。組。い。ら。フ。た。、。手。ル。も。え。高。無。眉。し。…。な。ル。ハ。は。て。て。っ。い。い。も。い。る。情。
な。し。俺。に。出。分。の。の。感。意。工。手。イ。仕。と。着。、。っ。に。う。エ。ル。を。終。も。が。は。探。…。も。エ。ル。ハ。は。て。て。っ。い。い。も。い。る。情。
見。少。手。れ。自。足。そ。の。用。シ。上。デ。ら。る。ら。れ。あ。噂。そ。ベ。エ。を。情。ル。を。功。で。」 べ。目。麗。な。が。事。目。は。間。ル。
を。の。？。が。溢。た。は。手。の。イ。ガ。前。て。れ。？。出。分。猥。そ。ア。デ。？。付。が。。ベ。い。パ。…。か。ア。う。ア。何。姿。使。し。け。っ。？。に。を。シ。
中。ん。の。た。触。が。れ。ル。た。う。等。ラ。ル。い。と。っ。こ。な。し。部。淫。て。た。ル。け。着。ド。な。ス。」 愛。ン。ク。た。た。ろ。で。は。容。天。ら。ざ。だ。だ。先。務。イ。
背。ほ。ん。め。感。血。か。エ。っ。合。彼。は。エ。賢。分。知。か。差。す。る。ん。い。ガ。っ。か。イ。か。ア。な。可。ナ。テ。っ。し。だ。後。俺。で。る。揺。ふ。の。何。の。任。ラ。
の。に。て。歪。の。の。付。べ。座。れ。、。の。べ。て。は。て。エ。な。布。を。対。』。っ。ル。て。何。ブ。な。き。て。ね。の。為。落。て。っ。う。優。立。髪。だ。い。っ。う。す。後。
工。空。解。情。と。真。憑。い。ア。隣。が。た。ね。っ。ア。ね。狡。随。を。ル。い。を。出。す。な。て。も。た。と。ラ。い。に。る。も。の。解。と。ん。た。秀。て。を。も。て。剣。る。で。
シ。い。況。表。り。、。に。怖。た。が。たい。つ。破。、。た。く。件。全。リ。や。な。腕。に。実。な。エ。し。、。は。や。眩。っ。、。う。む。よ。を。っ。切。ろ。績。に。い。う。良。標。る。撃。背。
イ。軽。状。は。き。し。み。が。い。ル。っ。続。立。に。ね。っ。高。の。は。ン。じ。か。と。ル。の。く。ィ。語。上。ル。じ。の。知。あ。合。進。い。肩。や。を。だ。成。上。長。そ。地。目。振。出。の。
ラ。の。の。ル。っ。翳。し。分。眩。工。か。が。初。た。ま。算。回。ル。エ。ん。ら。頭。エ。し。熱。テ。豪。の。エ。ん。ル。く。ま。き。に。い。と。何。葉。何。…。の。の。も。心。の。に。ル。
す。そ。今。エ。は。り。憎。自。と。り。無。寂。腹。最。れ。し。計。今。エ。フ。る。柔。リ。癒。、。ク。て。誤。ィ。る。工。良。、。付。プ。う。り。、。言。て。…。皆。色。つ。て。使。し。界。エ。
探。し。、。べ。も。振。と。…。リン。は。静。に。を。ら。て。』。で。、。シ。、。れ。の。た。ン。『。し。サ。っ。錯。デ。て。シ。、。は。に。ッ。も。ク。俺。、。っ。は。、。紅。い。っ。天。い。間。ベ。
を。か。前。ス。で。を。り。…。ツ。エ。葉。く。当。黙。め。れ。？。徹。ど。イ。い。ら。白。っ。エ。乱。…。』。行。ル。っ。イ。前。れ。手。テ。…。ッ。…。度。使。れ。ど。い。は。と。達。な。人。ス。
服。し。お。ア。今。剣。怒。俺。ボ。フ。言。暫。本。沈。は。さ。え。冷。け。ラ。は。着。純。被。フ。動。混。…。う。試。ガ。思。ラ。お。そ。上。ス。…。ガ。…。一。天。そ。け。淡。彼。に。俺。ら。に。ア。

「もか」「俺れしねラ酷に再天そ一神冷ラ座隣こた危さフ逃
「天ね嫉アア俺れしねラ酷に再天そ一神冷ラ座隣こた危さフ逃
「使え妬ススッなてえイ過惑び窓の帯を徹、りにこだ険ッェげ
「っ。と…べてか尽、シぎわ沈か銀に…なラ込座になだきンて
「て必か…エ頑っくアエじさ黙らの冷…言インっ着ら。のり！
「神死、」ル張たすスルじゃれが銀輝気冒葉シだていぬ磔エ
「ににそののっ。天べがねて場のきが澆とエまいたフのルア
「仕なん言てそ使エ口え、に月に満し蒼ルまた時エ状がス
「えっな葉るしはルを？誰落明、ちたの…アフにン況叫べ
「るて醜によて救。挟かちか鮮るな炎…スエ眩リなんエ
「者『いあな俺っ私ん神のたり烈。。を』ベンきエどだ
「だ神争る。はてはだっ都。がないア発エリ…ル比。！
「ろのい種良責く思がて合降蒼やスしルエ…のべ物彼は
「？為にのいめれうア。のりが、べたは呆がし子に『
「で尽ま望使れえだべんいいつてルは然立てにも『断
「もくる感にのけエか様でたの』ラ上このスならな
「、せだがな。？どル、にく。生イシエた…ルほど
「そのけ混ろ…天…そてり。の息のだ。』立ちし
「の天」ざう…天…そてり。の息のだ。』立ちし
「神使っつて間っはを居さの根のを見ちし
「っ』てて間っはを居さの根のを見ちし
「てにい努って…聞なれの根のを見ちし
「何なた力て使…かくてのを止たを見ちし
「なる。し神い」ずてるのを止たを見ちし
「なる。し神い」ずてるのを止たを見ちし

ラも天た仲約みね間ラフでくフ何ペフだ冷ア悲た友過手神鮮四で
っ「にしわ仲「強？」「「し「ん
イうと。間束とばのイエもてだエをリエがたスし。を去によ烈枚い
シは地。同し苦な為シン…、カン言ドン、く…み。想形はりなのっ
エるが。士たしらにエリ…でらりわッリも言…に。うでせ与輝翼た
ルか数。で。みな私ルエでも…エんとエういど満。心そイえきを。
の昔え。刃恋をいはがルも傷…ルとのル彼放うち…うクらに持
静と切。をい背窮ア断が！付だのし瞳のはたかた…二りれ小つ
か言れ。交慕負愁ス言涙。きか懇てが前『れ無笑。慈人ツた屋蒼
なっぬ。えいわにべしすで易ら願い濡で天た事み。愛をド聖全き
声て命。、ず苛エたるもい！とるれ殺使言でを。に愛・な体天
にもを。命憧にまる。ア天」もかる意』葉」浮。満でうるが使
明い失。をれ済れの。ス使。言、。をでに。か。ちたラスがま彼
かいい。奪てむる命。ベは。え容。失はフ。べ。た。幼イが蒼れ自
なだ、。いいよのを。エ他。る易。わなエ。た。いシ握いた身
怒ろ互。合たうは奪。ルに。叫び想。い。リ。後、。天エら輝後が
りうい。う者、。う。は。居。に。像。断神エ。フ。使ルれき、「
が。の。悲に天こ。天。な。に。像。断神エ。フ。使ルれき、「
混。心。惨胸にの断。使。い。ラ。が。罪。を。ル。エ。ン。…。が。て。を。月。良
ざ。に。な。を。背。私。罪。だ。よ。！。シ。イ。付。者。冒。は。ン。リ。エ。君。腕。…。の。た。つ。登。眺
っ。深。い。歴。貫。く。一。者。よ。！。シ。イ。付。者。冒。は。ン。リ。エ。君。腕。…。の。た。つ。登。眺
た。い。傷。を。負。い。は。れ。を。で。し。僕。方。が。口。た…返。持。本。り。へ。称
。は。れ。を。で。し。僕。方。が。口。た…返。持。本。り。へ。称

「居」「頼」「の」と「久ア」俺「葉」「し」「義正清ひミあせ師断己年
師ホし古隠おり…それはホお口ホア久アた俺そほさそ近そ洞れ木の約小正天た義正清ひミあせ師断己年
範ッてい居前な…う良ウ前がッス々ス。、うんようくう窟な々包束さし魔。も直廉とカのめ範罪の老
っホお記しなさ悪不い、さ悪ホベのベ。師言のな言に感かいのみはない大立でと工栄ての者弟い
てッっ憶てん過か貞事とんいッエ弟エ。範っ短らい断じら。間だ守包と戦た、高きル華後洞を子た
今ホたをたがぎっ腐じ溜はのホル子ル。のてい、残罪た遠に…るみいのぬ眩潔、とが一窟名が天
まッか呼？こてたれゃ息そが、もがの。おか時師し者がざ小た…をうあ世しな夢ル再度の乗己使
で。らび」のななるがをん難とつこ笑。蔭ら間範てが心かさ。…そこと情い黄をシび、傍るのの
何何の起鍛。な…吐な点師らんみ。でアだ。ア居はるな天直とが界辟どのたエるの立髪子き
人人おこ錬つ頼。…い天じ範れなに。ちスが色する不ア天使で手…軍易ま大。ル日輝つのをに
く弟」して。場いり鍛そた使やがるん悲。よべ、々べ。思スの真に…がしっ天とがき古天断応
ら子て。にっな錬れ後達があ笑よでし。っエ静、エ議ベの姿が直っしっ隠ぐをうるあ樹はする者
いに。来いい場にどののう悪み。とルかあるく。ルの消えで師ぎりした正出柱そにか言は誰
子たの。ま声中天れ範少。笑っ混。天師温が洞らの背えで師ぎりし、い本一子枝もとは
にかか。で。使過はし。みたぎ。とにい。を。落中て。可範るな。こ義さにん見らわ…も
しな。師。は。掛」達ぎ温違。を。っ。し背時その後。か。愛はとり。の感な。よなせフず…居
た。ん。範。な。け。が、和。っ。作。師。た。し。て。を。間。し。に。着。向。か。ら。、。師。範。は。テ。一。」
？ぞ。は。毎。し。な。情。笑。た。の。だ。成。向。を。て。し。い。か。ら。、。天。を。に。潜。奥。溢。で。て。を。や。り。そ。も。か
」覚。書。か。ら。こ。う。な。天。を。も。弟。が。長。け。過…た。て。い。て。師。範。は。じ。や。て。と。お。久。い。方。希。ら。れ。は。の。降。去。な
え。か。ら。こ。う。な。天。を。も。弟。が。長。け。過…た。て。い。て。師。範。は。じ。や。て。と。お。久。い。方。希。ら。れ。は。の。降。去。な
と。ら。顔。を。に。来。ど。ば。無。れ。さ。た。事。ン。は。一。」
ら。ん。を。に。来。ど。ば。無。れ。さ。た。事。ン。は。一。」
わ。上。来。ど。ば。無。れ。さ。た。事。ン。は。一。」
い。上。来。ど。ば。無。れ。さ。た。事。ン。は。一。」

く …… 。 ……
粒。し たため見へ …… 弟雜 ……
大だて っ止を中 …… 複 …… ろ前 …… うに ……
にのち まを者の …… や、 …… だる …… たいた ……
瞳た墮 止ルた獣 …… じず …… たす …… めらた ……
金めで がエっ魔 …… 分か …… し天 …… 締く果 ……
の始ま きシだい …… 」充届 …… た墮 …… りるを ……
ルち前」動イ友し …… ！うは …… 。果ら …… 握え割 ……
エ落お！のラとま …… …… もに …… たをが …… を迎役 ……
べで たが師ぞ …… …… 耳 …… っ割 …… なだ ……
ス度！っ工範るお …… …… だの …… 振役 …… 食 ……
ア速ルまシ師かが …… …… …… …… …… …… ……
たい工始イ、ざ達 …… …… …… …… …… …… ……
っ早シうラ使遠使 …… 私イ …… …… …… …… ……
思リイもで天は天 …… …… …… …… …… …… ……
とよらは先のルな …… …… …… …… …… …… ……
、で、刻の根エさ …… …… …… …… …… …… ……
だまれの線羽べ小 …… …… …… …… …… …… ……
先きが天視枚すうたい …… …… …… …… …… …… ……
がっ下墮の四ア纏っ …… …… …… …… …… …… ……
天さ …… …… …… …… …… …… …… …… ……
墮が！！エ人行き …… …… …… …… …… …… ……
、体んいべーて輝 …… …… …… …… …… …… ……
分のかなすうちい由 …… …… …… …… …… …… ……
多ルいれアも墮白 …… …… …… …… …… …… ……
知「 …… …… …… …… …… …… …… …… ……
「 …… …… …… …… …… …… …… …… ……
「 …… …… …… …… …… …… …… …… ……
ん …… …… …… …… …… …… …… …… ……
「 …… …… …… …… …… …… …… …… ……
「 …… …… …… …… …… …… …… …… ……
「 …… …… …… …… …… …… …… …… ……
「 …… …… …… …… …… …… …… …… ……
「 …… …… …… …… …… …… …… …… ……
神墮心 …… …… …… …… …… …… …… …… ……
約束 …… …… …… …… …… …… …… …… ……
小 …… …… …… …… …… …… …… …… ……
そ …… …… …… …… …… …… …… …… ……

を小 ……
き ……
の ……
の ……
達 ……
者 ……
か ……
す ……
迷 ……
澄 ……
走 ……
奔 ……
、 ……
れ ……
縛 ……
に ……
レ ……
ソ ……
な ……
さ ……
小 ……

「タコ周徐ヨ生クオマ意のク生や顔フそフ呆小純腕止自傷誰友俺殆何…最だあア近…頭八いア
「スッ困々ココアツワマ意のク生や顔フそフ呆小純腕止自傷誰友俺殆何…最だあア近…頭八いア
「ケチのセルテセエ剥い上テルや引んだんあな足ろのい…を…喘…！」の…あべいフ骨裂れべ
「テニ木大…モシロヤ、出木覆マノ…つエでフ体根け…体さ誰ん俺と大願…あエてにきエ
「…、々ぎ…ノマ、ク、ク、カウエヲ止らルはフエにがでっもえかなは変ながい…のた…身さよは
「…キがくヨコエクク、生口口々意茂クッ！アき。！エの…無は！八い…目、わ生届い…あ顔の…をれ、覚
「」腕なコ…セコ…セセ木殺いク…抱い…ンリ数…無は！八い…目、わ生届い…あ顔の…をれ、覚
「…のるセコ…セセ木殺いク…抱い…ンリ数…無は！八い…目、わ生届い…あ顔の…をれ、覚
「…声そ」ッ生口口々意茂クッ！アき。！エの…無は！八い…目、わ生届い…あ顔の…をれ、覚
「」にれへル」がザ満たテシ」スしヒ」ル枝散、エきれエわな足音のか、とアスベエルは視線を森の
「呼、ヨモセ、クッ」を線を！」骸態をた。て、奪い合う様
「応、コノヲ視全エ！」にまの形をた。て、奪い合う様
「す助、セヨ、」エたの腕いき取付ま…そ。フまい葉なとアスベエルは視線を森の
「るけ、…」を線を！」骸態をた。て、奪い合う様
「。て…」を線を！」骸態をた。て、奪い合う様
「貫えなはい悲哀と憤怒（
「えなはい悲哀と憤怒（
「なはい悲哀と憤怒（
「はい悲哀と憤怒（
「い悲哀と憤怒（
「はい悲哀と憤怒（
「悲哀と憤怒（
「哀と憤怒（
「と憤怒（
「憤怒（
「怒（

フ顔激「ッや痛…と首が俺な全、消え死腕え、んが、楽腹鼓だに、膜にな翼にっや貼た。にまくで食らいい付いていた怨念の蓋の「…そんに死え突を…さ全のい今男が歩く、と、恐れおののく様にな木々がサアッとの避けて「お地先にアお…『俺の…』何森男まア男代ま必本オメう身たオ終離静「…」

連森城石そ表ら肌フい首たニオ…ガ無だ…背そた柱な部ひ翼動暗い不あア何自…使くおけラ森お化ない遠遠

れを門段こ情しの露ッが後。人一…ラ言が…筋の。のん屋とをくいいんすす分…い。前てマで前けなら慮慮

て抜ををにのい露ッが後。ラはもの。をい寒屋い、見のげビ屋来背翼エ気危ウの。天ののっコをりいい

行け抜登は無も出シ歩ラ。マ森喋器口隠」気の。広こ渡机れののだ後いルだ機モ女。使』言てコ作、！らん！

かてけり出いのがユをで。ンの方ね中無て。いのすのば尾中ろからは？がリが。のん葉いでっ今ん！

れ石る、迎白だ少テ刻束。の方ね中無て。部のア上アをでうらね意」迫の部の翼だをた…てか俺」お

た畳と幾えいっな一むね。の方ね中無て。部のア上アをでうらね意」迫の部の翼だをた…てか俺」お

先の蠟重の顔たいルこら。世へえにいい。じひ。屋屋スにス持翼？声え味っ翼屋。は。聞モ…いらは、うわ

は道人に使にがゴ口とれ。話帰…満かる。な。に？べ銀べち。がよが。て？の。オ悪いノ」の分俺は、うわ

森を形もい口、シンはた。を…たら白。が。は。工の工、時希聞！解。い」奥。一魔た、の分俺は、うわ

の進の巡魔はソッグな長。して不さ喋い。ら。石。ル鳥ル翼々望こ。っ。る。事。オ。クからアこ。か。の。は。あ

外みよら達無のクドい。銀。残き味たな帯。い厚。り。奇。が。背。七。々。る。た。て。、。ラ。直。観。オ。オ。ぎ。イ。エ。屋。う。何。な。ん

れ、うさがか身調レ。銀。り、…液いにたい。の。機。生、り輝を。お衣けん。で。感。じ。た。ア。真。の。ボ。思。身。物。、。か。っ。そ。」

崖シ女たんだに口の。髪。の。へ…体ら時。ア本。が。幾。つ。も。を。は。き。異、。同。ラ。」。い。返。し。ア。ス。べ。黒。な。翼。の。？。を。使。が。を。

にギが高で。女。下。を。者。ビ。」を。し。折。ス。が。幾。つ。も。を。は。き。異、。同。ラ。」。い。返。し。ア。ス。べ。黒。な。翼。の。？。を。使。が。を。

聳シライ立目らグに。揺。は。城。ら。血。エ。ぶ。つ。も。を。は。き。異、。同。ラ。」。い。返。し。ア。ス。べ。黒。な。翼。の。？。を。使。が。を。

えとマ城っはしド覗。が。フ。で。事。無。ん。だ。り。消。部。れ。思。を。た。っ。魅。け。ツ。ラ。の。？。を。使。が。を。

立鳴ン壁て閉さしく。す。エ。飼。事。無。ん。だ。り。消。部。れ。思。を。た。っ。魅。け。ツ。ラ。の。？。を。使。が。を。

つるをを居じはスク。こ。エ。飼。事。無。ん。だ。り。消。部。れ。思。を。た。っ。魅。け。ツ。ラ。の。？。を。使。が。を。

古跳出潜たた無を口。と。エ。飼。事。無。ん。だ。り。消。部。れ。思。を。た。っ。魅。け。ツ。ラ。の。？。を。使。が。を。

びね迎っ。まい身ス。も。エ。飼。事。無。ん。だ。り。消。部。れ。思。を。た。っ。魅。け。ツ。ラ。の。？。を。使。が。を。

た橋えて十ま。にし。な。く。エ。飼。事。無。ん。だ。り。消。部。れ。思。を。た。っ。魅。け。ツ。ラ。の。？。を。使。が。を。

城を、広人黒。纏。た。く。エ。飼。事。無。ん。だ。り。消。部。れ。思。を。た。っ。魅。け。ツ。ラ。の。？。を。使。が。を。

「ら子ほ「「「「「「
姿し素ラフ仰フにフ自綺どラそ見やラ妖天勝止
をげ晴マエ向エ、エ分麗にマのる、マし使ちめ
現にらんけんア、をな美ん横だ止んいの誇ろ
し主しがりのリスフ支身の顔けめが紋清っお
た張い賞エ姿エベエ配体い口をでろ手様純たお
フし…賛ル勢ルエンしだ。角見も…袋がをラお
エて…ののでのルによと見がた充…を描悪マ！
ンい魔言身グ頭は…う思て吊ア分」外か魔ン」
りた界葉体ツか強…とわいりスイしれのもの
エ。にをがタらいフすなる上ベイたた手笑
ル。墮口宙り顔怒エるいだだがエが。手でみ
は。ちににと、リンオかけっ、が犯に
一。てしフ力首をにオ？でたはど露すア
糸い、ワを、感、コ悦。嫌うわのス
纏なフリ失肩じ触ウ羨楽なすにだよエ
わがエとっ、たるモまを予れなよエ
ぬらん浮て胸。、りし感感ばる」ル
姿、りいい、なのいじに最。そ全身全
で美エたる腹！翼とら顔高の全身全
、しル。身、」ともれをの引悦手全
丸いにく、に腹下戦言る引悦手全
く天触に腹いえる」き楽をを霊
な使れラ部なる。攀がアの力
っのたま、が。ら得ス力
「」

アスベエルの全身から怒りの炎がほとばしった。

純真無垢なフェンリエルの体に悪魔が触れる。そんなこと、例え髪の毛一本だとしても許せなかった。

墮天するのは自分ひとりのはずだった。

泣きながら「もう、アスを一人になんてしないから！」と叫んで一緒に墮天の道を選んでくれた無二の親友を悪魔の好きにさせるなんて許せるわけがない。

「本当にうるさい奴だ。少しは静かにできないのか？」

渾身の叫びと怒りの波動がラマンの手を止めた。振り返ったラマンにアスベエルは容赦の無い怒りの視線をぶつける。もう一度触れようものなら今度は武力行使に出ると目で訴えていた。

「その気概だけは認めてやろう。だが、背中の翼の同化が完全に終わるまでしばらく休め。心配するな。お前もこの天使も命を奪ったりはせん」

「フェンから離れろ！ 触るな！」

ラマンの言葉をそのまま信用することは難しい。警戒心を剥き出しにしたまま、アスベエルはラマンの出方を窺うように睨み付けるのを止めなかった。

そんなアスベエルの様子にラマンが呆れ顔になった。

「物わがりの悪いヤツだ。動くな。喋るな。さっきの怒りで翼を支配したのは褒めてやる。意外に芯が強い奴だな。その調子で『支配すること』を覚えろ。魔界ではそれが基本だ」

「支配、する？」

「体力が戻るまで動かないことだ。同化が終わるころにはそれなりに動けるようになっているだろう」

「体力が、戻る？」

言われて初めて気付いた。断罪者に貫かれた胸を始め、森で負った傷が塞がっていた。それだけではない。背中に植え付けられた翼も、意識を集中させれば不快感はあるものの、何とか動かせることができた。慣れてくれば以前の翼のように自由に使うことができるかもしれない。

「すごい」

認めたくはないがラマンのお蔭で傷は治り、自分の意志で動かせる翼を手に入れられた。。

「もう一度、ガラスの器の中へ入っている。その方が傷も早く治るし体力も戻り易い」

ラマンが顎で示した器はこの部屋に連れて来られた時の器とは別だったが、やはり黄色い液体で満たされていた。

「何なら抱いて運んでやろうか？」

近付いて来るラマンの言葉に眉を顰めたアスベエルは奥歯を噛み締めて背中に意識を集中させた。翼は動きそうだ。

「入ってやるよ！」

吐き捨てるように言うとアスベエルは台の上に立ち、宙へ身を躍らせた。骨が軋む。手や足、意図しない箇所がピリピリと痺れる。だがオオコウモリの翼は動いた。

「うっ、あっ、おっと！」

動きは定まらなかったが何とか体は宙を舞い、示されたガラスの器に到達した。だが、わずかな気のゆるみのせいか、バランスを崩して液体の中へ頭から突っ込んでしまった。

「うわぁ！」

「同化は終わっていない。無茶をするな」

再び呆れ顔のラマンに言われ、アスベエルは慄然とした表情になった。しかし体は楽だ。確実に回復している。このまま大人しくしていれば動けるようになる、と確信したアスベエルは口を閉じた。

ラマンは信用できない。だが従っている方が得なのは火を見るよりも明らかだ。

アスベエルとの遣り取りで気がそがれたのか、ラマンもフェンリエルにそれ以上、手を出すことはしなかった。

ホッと気が抜けたからか、アスベエルは強い眠気に襲われた。目を閉じるとそのまま久し振りの深い眠りに落ちていった。

温かい。

静かで穏やかだ。

鼻腔をくすぐる甘い香りに頬が緩みそうだ。

「へへへ」

思わず漏れた自分の声でアスベエルは目を覚ました。

「え、あ、ああ?!」

どれくらい眠っていたのだろう。目を覚ましたアスベエルは周囲の光景に目を丸くした。

黄色い液体の中に居るのは変わらない。だが、自分の耳元や頭、肩の周りに小さな生き物がたくさん居た。顔は猫だ。しかし腹から下が違った。十本のウネウネとした触手が映えていて、それらを器用に使って液体の中を泳いでいた。その生き物が時々、アスベエルの頬や耳、肩にぶつかっていたのだ。

「変な生き物」

アスベエルの呟きに答える者がいた。ラマンだった。

「食えるぞ」

「は？」

ラマンの言葉に目を丸くしたアスベエルは、ラマンの隣に立つもう一人の人物に気付いた。

深い緑のようで緋色が混ざっているようにも見える不思議な瞳が綺麗な男だった。銀髪の彼はしげしげとアスベエルを見詰めながらラマンと言葉を交わしていた。

「いつからこんな可愛いペットを飼うようになったんだい？　そういう趣味があったなんて知らなかったよ」

ラマンの隣に立ち、対等に話をしているところを見ると彼も相当な上級の悪魔だろう。

悪魔は危険だ。墮天して即時、それを身をもって味わった。

だがアスベエルは彼の瞳から目が離せなかった。「魅入られた」そんな言葉がぴったりだった。

「お前、好きだろう？ お互いを『親友』と呼び合い、相手のためなら悪魔に身を売り、魂を差し出すことさえ厭わない、弱く脆く愚かな存在が」

ラマンの言葉にはムツとしたが、アスベエルは銀髪の悪魔を見詰めたまま動けなかった。

吸い寄せられるようにガラスに手を伸ばした。その姿は助けを求めているように見えたかもしれない。

「可愛いペットだね？ 二人まとめてもらってもいいかい？」

アスベエルの心を一瞬で虜とした銀髪の悪魔は目を細めて微笑み、小さく頷きながらそう言った。

何か含みを持たせたような笑みにアスベエルは虜となった。不可思議な瞳の悪魔から目を離せず、ラマンと並んで話す彼の一举一動を目で追う。

「朝から空が騒がしいと思っていたが、天使狩りがあったらしい。そしてこんな子供が落ちて来た。しかも片方は天使のままだ」

「確かに珍しいね。それで？」

「欲しいか？」

「欲しいかって？ 私が珍しい物好きで収集癖があるのは知っているだろう？ 返事は解っているくせに」

ラマンがニヤリと笑みを浮かべた。危険な笑みだった。

「対価に何を差し出す？ メフィスト？」

ラマンの意味ありげな言葉に銀髪の悪魔は眉を顰めた。彼の名はメフィストというらしい。

「対価に何が欲しい？」

メフィストは明らかに機嫌を損ねていた。眉間に深い皺を刻んだ顔で腕を組み、ラマンの顔を見詰めている。暫く二人の間に沈黙が漂った。

「『お前自身を好きにする権利』でどうだ？ それと引き換えに二人の身をお前にくれてやる」

ラマンがそれで手を打つ、と頷いた。

アスベエルはゴクリと喉を鳴らした。これでメフィストが首を縦に振ればラマンの元から逃げられる。まだ眠っているフェンリエルの姿をチラリと見た後、祈る思いでメフィストを見た。

「やっぱり、要らない」

フイツとそっぽを向いたメフィストに今度はラマンが不満そうな顔を作った。

「一筋縄ではいかんな」

フウッと小さな溜息を吐いたラマンは踵を返すと部屋から出よう、とメフィストを誘った。メフィストが少し遅れてその後を追う。

「そもそも何しに魔界まで出てきた？ 出不精のお前が館を出るとは余程の用事だな？」

「うん？ まあ、ね」

メフィストの歯切れは悪かった。

「言えない用か？」

「花を探しに来たんだよ」

「花？」

「無月鏡華だよ。花卉と蜜と根をうちのメイドが欲しがっていてね。定期的に見つからなくて、放ってあった使い魔がそろそろ咲く時期という情報を寄越したから来てみたんだけど」

メフィストはそう言いながらラマンを見た。何か聞いたような目をしていた。

「メイドだと？ フン。相変わらず甘い奴だ。使い魔なんぞ、ただの道具だろうが」

「知らないかい？ 花が咲いている場所。一度咲くとその株が次に咲くのは百の魂が天と地を百

度廻った後と言われているんだ。この機会を逃すと、またメイドが悲しんで美味しいお茶を淹れてくれなくなるんだよ」

大変なことだ、というようにメフィストは肩をすくめながら言った。ラマンはくだらない、と一蹴した後、メフィストの視線に根負けした様子で言葉を続けた。

「森を抜けた先、河を遡った紫岩の谷を探したか？ あの花は滝の裏、竜牙砂に咲く華だ」

「流石によく知っているね。あちこちから実験材料をかき集めているだけある」

「情報料は安く無いぞ」

「出不精で滅多に現れない私自身が、わざわざこうして出向いて来て姿を見せてあげただけで十分だと思わないかい？ それに城に入った時、私の手を触っただろう？」

言葉を交わしながら部屋から出て行く黒い悪魔と銀の悪魔の背中を見送ったアスベエルは、暫く呆然と液体の中に立ち尽くしていた。

「な、なんだよ、アイツら！」

ここから逃げ出す希望が見えた、と思ったのに、それは一瞬にして消え去った。後に残ったのはやり場の無い怒りだった。

「ちくしょう！ ちくしょう！」

二人の会話を思い返すと余計に怒りが増した。

完全にペット扱いされたことは勿論、ラマンがメフィストをモノにする為の道具に使われそうになったことも腹立たしい。しかし、見ず知らずの悪魔に期待した自分の安直さがもっと腹立たしかった。

「絶対、絶対、ここから抜け出してやる！」

一眠りしたこともあって頭はスッキリしているし、体の傷もほとんどなくなっていた。禍々しい翼もそれなりに動かさそう。フェンリエルを抱いて飛ぶことも不可能ではない。

「機会が来たら……逃げ出してやる！」

魔界では『支配する』ことが重要だ、とラマンは言っていた。アスベエル自身、まだラマンに『支配』されていない。そうなる前に魔の手から逃れなければならない。

心に決めたアスベエルは液体の中で暫くじっと息を嚙め、全神経を研ぎ澄まして物音ひとつ逃さないように外を見詰めていた。

ラマンが出て行った後、部屋には誰も入って来なかった。

時々、廊下を使い魔の女達が行き来する姿が見えたが部屋に入ってくる様子はない。それどころか、こちらに注意を払うことすらしなかった。彼女達は命令されたことを粛々とこなすだけなのかもしれない。

「逃げられるぞ」

部屋の窓の向こうに月が見えた。無造作に開いた窓辺ではレースのカーテンが揺れている。窓には何の障壁もなく、外と繋がっていた。

「フェン！」

ガラスの器から顔を出したアスベエルは、部屋の中央の台に横たわるフェンリエルに小声で呼びかけた。返事は無い。

液体で濡れそぼった体を低くし、部屋に並ぶ石造りの机に身を隠しながらフェンリエルの元へアスベエルは駆け寄った。

「フェンッ！」

銀の光に包まれたフェンリエルはピクリとも動かない。どうしよう、と迷う間なんてなかった。不定期に廊下を行き交う使い魔に見つかっては元も子も無い。

「とにかく、早くここから出よう」

服を探す手間も惜しんだアスベエルは、何も身に纏うことなく翼を揺らすと、フェンリエルの体を抱き上げて一気に窓に向かって飛翔した。

「逃げるぞ、フェン！」

自分に言い聞かせるように呟いたアスベエルが窓辺に到達した時、スウッと天井から一匹の蜘蛛が降りて来た。アスベエルの羽ばたきが起こした風で蜘蛛が揺れた。

「！」

蜘蛛の揺れに呼応するような鐘の音が部屋中に鳴り響いた。壁に飾られた絵画の中の鐘がけたたましい音を立てていた。

ハッとしてアスベエルは天井を見上げた。そこには巨大な蜘蛛の巣が広がっていて、細い糸が柱や壁にも渡されていた。部屋に異変が起こると糸が震え、異常を感知する仕組みになっていたようだ。

廊下を進んでいた使い魔達が一斉に振り返り、全員が進む方向を変えて部屋に滑り込んで来る。

「バレた！」

大急ぎで窓辺を離れ、空へ舞い上がるアスベエルを使い魔達の絶叫が追う。

頭が後方へ90度倒れ、首がパッキリと割れた使い魔達は、裂けた喉でコウモリをも落とす超音波を含んだ叫びをあげていた。

「起きてくれよ、フェン！ 頼む！」

眠ったままのフェンリエルの体はずっしりと重かった。使い魔達の異常な叫びであの蛇やオークが出てきたら面倒極まりない。

とにかく、逃げよう。飛べる限り、体力が続く限り飛び続けよう。

アスベエルは必死の形相で昏い空を飛んでいった。

どこへ行けばいいのか全く解らない。

だが、ラマンの城からできる限り遠くへ逃げたかった。

逃げ切れる保証はない。そして例えラマンから逃げられても、その後、魔界で生き抜いていく自信はない。

「逃げなきゃ」

しかし、逃げる以外、アスベエルに選択肢は無かった。

「ん？」

フェンリエルを抱いて必死に飛び続けるアスベエルの目に、フワリフワリと宙を漂う光が見えた。

「なんだ？」

金色の鱗粉を振り撒きながら蝶が飛んでいた。それも、まるでアスベエルの注意を惹こうとするように、近付いたり離れたりにしている。

「呼ばれてる？」

そう感じたものの、アスベエルは蝶に付いて行くか否か迷った。

フェンリエルは眠ったままだ。ラマンは「天使のままだ」と言っていたし「魔界の気にあてられ続けるとあっという間に力を消耗して死ぬ」とも言っていた。今のままではフェンリエルは危険だ。

「どうしよう」

迷う時間も余りない。蝶はフワリフワリとアスベエルの周りを飛び続けている。

ギリッと奥歯を噛み締め、目を閉じた後、アスベエルは蝶に付いて行くことに決めた。

「どこへ行くんだ？」

この選択が凶と出るか吉と出るか。喉から飛び出しそうなくらい激しく脈打つ心臓の音を感じながら、アスベエルは蝶の後を追って森の中へ舞い降りた。

「あ！」

森の中に降り立ち、蝶に導かれるまま川沿いを暫く進んだ後、アスベエルは驚きの声をあげた。

「お、お前！」

川の中州にひとりの悪魔が立っていた。ラマンの城で見た銀髪の悪魔、メフィストだった。アスベエルの声が届いたのか、メフィストがゆっくりと振り返った。

「おや？ 迷子かな？」

メフィストがフフッと笑いながらそう言った。

彼が手招きするのが見えた。

アスベエルとフェンリエルの体がフワリと浮いた。そして次の瞬間にはメフィストの傍らに立っていた。

「メ、メフィスト？」

「私の名前をよく知っているね？」

喉で笑いながらメフィストが言った。何を言ってるんだ、コイツ、とアスベエルが文句の言葉を口にしようとした時、後ろでオークの咆哮が聞こえた。振り返ると、嫌な追手の姿が見えた。

「き、来た！」

アスベエルはこみあげて来る恐怖を必死に抑えながら身構えた。フェンリエルを抱き締め、いつでも逃げ出せる体制を取る。するとメフィストがスイッと前に出た。まるで二人を庇うかのような動きだった。

「メフィスト！」

怒気をはらんだラマンの声がした。

「何か用かい？」

オークとヘビを従えたラマンに向かってメフィストは涼しい声で返事をした。

「二人を返してもらおうか」

「二人を返す？ 何のことかな？」

メフィストは肩をすくめてラマンに告げた後、笑顔で言葉が続けた。

「この二人は今、私が森で拾ったんだよ？ 一糸まとわぬ姿で震えていたから可哀想になってね」

「とぼけるな！」

「ああ、そういえば、さっき見せてもらった可愛い二人組に似てなくもないかな？ でも『今、私が森で拾った』んだ。『私のモノ』だよ」

サラリと言い放ったメフィストは真っ直ぐにラマンを見据えて頷いた。

メフィストはそこに佇んでいるだけだ。決して殺気を放っている訳ではない。しかし、オークも巨大な蛇もラマンの後ろで硬直し、ピクリとも動かなかった。

緊張の糸が張り詰めた緊迫した空気が辺りを包む。

それは暫く続いたが、ラマンの方が先に折れた。

「そういうことにしておいてやろう。全く、お前という奴は！」

苦々しく吐き捨てるようにラマンは言うと言を返し、森の中へ消えていった。

二人の悪魔の無言の闘いを目の当たりにしたアスベエルはラマンの背中が見えなくなってからペタンとその場に座り込んだ。腰が抜けたのだ。

「大丈夫かい？」

メフィストが笑った。コクンと首を縦に振ったものの、フェンリエルを腕に抱いたまま、アスベエルは動けなかった。

「あのラマンにたてついて、私の協力も無しに脱走を試みるなんて、無茶な子だね。もう少し鎮まってから使いをやろうと思っていたのに、まさか自分から飛び出すなんてね」

「た、助けてくれるつもりだった？」

アスベエルが目を丸くするとメフィストは曖昧に笑い、手を差し伸べて来た。

「私は今、君達をココで拾ったんだよ。花摘みに行くんだけど、手伝ってくれるかい？」

メフィストの微笑みを見たアスベエルは頬が赤くなるのを感じた。

「い、いいぜ？ 手伝ってやるよ」

照れ笑いしながら差し伸べられた手を握り返し、アスベエルは小さく頷いた。

「名前は？」

「アスベエル。こっちはフェン。フェンリエルだ」

「アスベエルにフェンリエル。私はメフィスト。メフィスト・フェレスだよ」

そう言ったメフィストが天を仰いだ。バサリとその背に巨大な漆黒の翼が広がった。

「さて、行こうか。可愛いメイド達が首を長くして私の帰りを待っているんだ。正確に言えば、私と花かな？」

フェンリエルを抱いたメフィストが空に舞い上がった。アスベエルはそれを追った。

「フフフッ」

「な、なんだよ！」

「素敵な姿だね、アス」

「へ？」

「そんな姿で長く飛んでいると、次から次へと悪魔達に襲われそうだね」

「え、あ！ あああっ！」

「残念だけど花はまた今度かな？」

アスベエルは笑うメフィストに手首を掴まれた。見た目からは想像も付かない強い力で引き寄せられ、抱きしめられた。

「さあ、帰ろう。狭間の界にある私の館へ」

アスベエルの周囲の景色が歪んでいく。

巨大な魔法陣に包み込まれた。

景色も空間も空気さえも歪み、ねじれ、三人は別の次元へ移動した。ほんの一瞬のようであり、気が遠くなるような長い時間でもあるような曖昧な感覚にアスベエルは酔いそうになった。

やがて、昏い空間の中に真紅の光が見えた。それは瞬く間に広がっていき、むせ返るような花の香りが当たりに溢れ返った。

「薔薇の……館」

広大な薔薇の庭の中に洋館が建っているのが見えた。

「さあ、帰ったよ、アスベエル」

メフィストに背をそっと押されたアスベエルは一瞬戸惑いの表情を作ったが、無言で首を縦に振った。

「お帰りなさいませ！ ご主人様！」

庭が見える館の入口に降り立つと、純白のメイド服に身を包んだ二人の少女が弾んだ声で出迎えてくれた。

「まあ！ ご主人様がお客様をお連れですわ、アリー！」

「まあ！ 可愛いお客様がお見えですわ、キュリー！」

心底、喜んでいる様子のメイド達にメフィストが告げた。

「残念ながら華は見付けられなかったよ」

メフィストが言うと、二人のメイドは表情を曇らせたが直ぐに笑顔を作り、パンッと手を叩いた。

「可愛いお客様にお洋服を準備してあげましょうね」

「可愛いお客様に美味しいお茶を淹れてあげましょうね」

そう言った後で、二人は声を揃えて言った。

「勿論、ご主人様にもとっておきのお茶を淹れますわ」

「頼むよ、キュリーにアリー」

「はい、ご主人様！」

悪魔が違えば、こうも使い魔の性格が異なるのか。

ポカンと口を開けたままアスベエルは何度も目を瞬き、その場に立ち尽くして成り行きを見詰めていた。

「フェンリエルは部屋で休ませよう。君は服を着てからテラスにおいで。お茶にしよう」

アスベエルはメフィストを見上げ、小さく頷いたが、さっきまでとは180度違う状況に戸惑いを隠せなかった。

「アス？」

「え、あ、うん」

動かないアスベエルを見たメフィストがクッと喉で笑った。

「その姿のままテラスに来ても良いよ。お望みならお茶をもらう前に君の体をもらおうかな？」

「なっ！ メ、メフィスト！」

「おや？ 胸まで真っ赤だ。もしかして期待していた？」

「ふ、服着て来る！」

アスベエルはメフィストに背を向けて走り出した。キャアッと悲鳴をあげて避けたメイドに「部屋はどこ！」と怒鳴るようにして尋ね、教えられた部屋に飛び込んだ。

全く不安が無かった訳ではない。

だが、一息つける場所を手に入れられたのは確かだ。

これからどうなるのか全く想像ができない。

「なるようになるさ！」

不安を払しょくするように強い口調で呟いた後、アスベエルは頷いた。

自らの意に反し、墮天してしまったアスベエルと天使のまま魔界に堕ちたフェンリエル。

二人の物語は本人達が気付かぬうちに始まっていた。

その事実と真実を知る者達が見守る中、短い幕間劇、慰めのような平穏が館を包み込んでいた。





編集後記

こんにちは、Neikoです。人それぞれだと思いますが私は夜、洗濯をします。乾燥機能も付いているので乾燥までしたいのですが、ズボンやシャツに、アイロンでは直せない強烈なシワができてしまうので一枚ずつ洗濯物を干しています。寝る前に洗濯し、早朝に起きて浴室に干し、浴室乾燥を2時間セットします。

これで家族全員が起きるまでに全ての洗濯物が乾燥するんですが、今は夏です。

脱衣所がメチャクチャ暑くて敵いません！除湿器もつけるので天候も気にせずカラッカラに乾かせますが、まちで暑いです。

何か上手い方法はないでしょうかね？ドラム式だと少しはシワがましでしょうか。ただ、ドラム式は恐ろしく重く、設置場所を選ぶと聞いたことがあります。それももう5年以上前の話ですが……。

洗濯機の寿命はどれくらいでしょう？そろそろウチのは買い替え時かもしれません。今のは自動(液体)洗剤投入機能があるんです。その機能は失いたくないです。

ほんの小さな機能ですが、毎日の洗濯ではかなり大きな機能です。何か良い洗濯機があるといいなあ。それでは。(^^*)。

奥付

【となりくみ事務局】

<http://www3.to/tonarikumi>

tonarikumi@gmail.com

イラスト：ZEM

文：Neiko

【電子版公開サイト】ブクロブのpapier

<http://p.booklog.jp/>



AZ stocks Vol.4～【無料】電子版同人マガジン

<http://p.booklog.jp/book/86955>

著者：AZ stocks

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/azstocks/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/86955>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/86955>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ